
気ままに。

咲坂 美織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気ままに。

【Zコード】

Z3745W

【作者名】

咲坂 美織

【あらすじ】

”黒ネコ族”の師匠は自由気ままに旅をするのが好き。その日も弟子に稽古場を任せて一人放浪の旅へ。「貴様に会うとこれだから……」いくら悪態をついても出会ってしまったものはしょうがない。一番嫌いな気ままじゃない旅に出る。

2011年12/4加筆修正しました。PV1,000越え、ユーチューブ300越え！ ありがとうございました。師匠の物語はもう少し続きます。もう少々お付き合いください。

2011年12/10 第1部完結しました。

嫌がりせの出会い（前書き）

師匠つて、どんな格闘技やるのでしょうか？
作者にも分かりません。

一応稽古場には5、60人いる設定です。……そんな感じっていいのか、師匠

感想等いただけると嬉しいです

嫌がりせの出金

トントンとリズムを刻むよつこ、右へ左へ軽くステップ。くるりとターンして相手の背後へと回つこむ。

「はい、おしまい」

相手の背中に容赦なく手刀をたたきこむ。背中に衝撃をくらつた少年はバランスを崩してその場に崩れ落ちる。少年が私を見上げながらちよつと涙目になりながら笑いかけた。

「師匠、相変わらずお強いですね。少しは手加減してください」
「最年少で師範代やつてるやつが何言つてんの。しかしまだ一段と強くなつたわね」

「ありがとうござります！」

こへら師範代といつても中身はまだ10歳そいそいの少年だ。頭の上の耳を嬉しそうにぴょこぴょこと動かした。彼は素早さで名の通る”白ネコ族”の少年だ。

「じゃあ、そんな強いリア君に後のことはずべてお任せして、私はまた放浪の旅にでも出よつかな」

「そんな、ひどいです！ 師匠！」

「じゃ、後は任せたぞ、師範代」

後ろでリアが何か（泣き）叫ぶ声が聞こえたような気もするが、無視してさつさと歩きだす。自由気ままな”黒ネコ族”。それが私の一つ名だ。私は機嫌よく頭の上のきれいな三角形の耳をぴょこぴょこと動かした。

「わい、リアのやつもからかってきたし、今日は何しよつかな」
森の中の一本道をとこと歩きながら、機嫌良く鼻歌を歌つてみる。そういえば以前、リアに師匠に機嫌が悪い時はあるのかと聞

かれたことがあつたな。たぶんない。ただ一つの例外を除いて。

「……何の用だ。黒いの」

「おやおや、相変わらず貴女は機嫌が悪いですねえ。同じ”黒ネコ族”じゃないですか」

「誰が貴様とつ」

「まあまあ落ちついて。また出たそりですよ、あいつ。つこでに僕の名前はミカゲです」

「貴様が来るとすぐこれだ。だから嫌なのよ」

名前のこととはさらりと無視。先のことが思いやられながらも、一応話は聞かなければならぬ。

「で、どこに出たつて？」

「（こ）から北にある”黒の森”です」

「遠……。しかも故郷か。一応伝言御苦勞をも。わつわと帰れ」

黒いのにわつわと背を向けて、北を田指して歩き始める。今回はちょっと遠いから帰るのは遅くなるだろつ。心の中でリアに謝る。いじりに帰れなくてごめん。

「……何のつもりだ？ 黒いの」

「だから僕はミカゲですつて」

私はありつたけの殺意を込めて腕にひつついたものを睨みつけた。黒いのはリアよりも1、2つくらい年上だ。その分体も大きい。リアでさえ今がギリギリなのだ。それ以上のものは正直”遠慮願いたい。

「離れる、黒いのー」

「（だから、僕はミカゲです）今回は”黒ネコ族”的故郷ですよ。帰るついでについていきます」

一人で気ままに旅するほうが断然好きなんだけどな……。仕方がないか。

「死んでも置いていくがいいな、黒いの」

「（だから）（省略）かまいません。自分の身くらい自分で守れます」

「……仕方がない。行くぞ、黒いの」「…………（ハア）」

そんなこんなで、北の”黒い森”に到着。途中黒いのが崖から落ちかけたりしたような気もするが……、まあ氣のせいだらう。現に息を切らしながらも私の後ろにいるしね。

「貴女は僕を殺す氣ですか！？」

「そんなつもりは一切無かつたんだけどな」

「……通常1週間の距離を2日で走破。これを殺す氣じゃないと言うんですか」

「……さてと、さつさと片付けて帰ろっかな」

とりあえず黒いのはその場に置いて、さつさと森の中に入つてしまつことにした。

「待つてくださいよ。どこに出たかも知らないのに勝手に森の中に入らないでください。だいたい貴女はこの森から……」

「分かってるわよ。私がもうこの森からは歓迎されないことくらい」今度こそ森の中に入つていぐ。今度は黒いのも文句を言わずに歩いてきた。何よ、急におとなしくなっちゃって。さつさと今までみたいにギヤー、ギヤー騒いでればいいのに。

「……こんなところだけ、やつぱりリアよりも大人よね」

「？ 何か言いました？」

「別に、何でもないわよ。で、あいつが出たのって、何処？」

「（）からさらに北にある”あの洞窟”です」

「……。あいつもいい趣味してんじやない」

思わずため息をついてしまった。あいつに会うとこうだけで気が滅入るのに、まさかあそこにいるなんて、嫌がらせとしか思えない。思わずため息をついてしまった。あいつに会うとこうだけで気が滅入るのに、まさかあそこにいるなんて、嫌がらせとしか思えない。

「行くしかないのよね、嫌でも」

珍しく何も言わず、黒いのは黙つて私の後に着いてきた。

嫌がらせの出会い（後書き）

次回は『あいつ』の正体が判明します！ たぶんリア君はここでお別れです。気にいつてくれた方がいればまた出すかもしれません……。

私とあるこいつ（前書き）

今回は監修の過去の話がメインとなつております。ちょっとシコアス氣味です。こんなはずじゃなかつたんだけどな……。

私とあいつ

森の入口から走って10分。私たちは岩壁にぽつかりと黒い口を開けたような洞窟の前に立っていた。

「さてと、『ご対面といきましょうか。危ないからあなたは外で待つてなさい』

「自分の身くらい自分で守れると言つたはずです。どうぞ』心配なさらずに』

いつもならそのまま付いてこさせるとこだが、今回はいつもこかない。

「黒いの、この中には何がいるのか分かつてんの？」

「分かつてますよ。貴女に伝えたのは誰だと思つてんですか」

「いちいちムカつく奴ね。分かつてんなら外にいなさい。いいわね」黒いのにくるりと背を向けて洞窟の中へと入つていく。そつと黒いの様子をうかがうと、ちゃんと外にいた。それだけ確認すると、私は歩く足を速めて洞窟の奥へと向かった。

「しつかしここは10年前から何にも変わらないわね」

私が最後にここを訪れたのは10年前、私が7歳の時だった。

「そして、あんたは10歳だつたわよね」

この洞窟の一番奥に広場のようになつているところがある。そこ のさらに奥に、一つの人影があった。私はその人影に殺意をこめた視線を送る。

「久しぶりだね、カララン。会えて嬉しいよ」

「私は嬉しくないわ。もう一度とあんたになんか会いたくない。父様と母様を殺したあんたになんか

「つれないな。俺はお前の兄だろ？』

「お前なんかつ……！」

怒りに震える私の様子なんかお構いなしに、10年前に縁を切った兄、リュウセイが私のほうに近づいてくる。

「俺はずっとお前に会いたかったぞ、カラーン」

「私をその名で呼ぶな！」

「おつと、これはあの日に君が捨てた名だったか」

あの日。私の人生で最悪の日。一瞬たりとも忘れたことはない。

この洞窟で、

「お前が父様と母様を殺した日だ……！」

「カラーン！ それから出かける時間よー！」

「はい、母様！」

私は手に持っていた帽子を急いで被ると、玄関で待つ母のところへと走つて行つた。

「カラーン、帽子が曲がってるぞ。ちょっとじじつとしてる」

「ありがとうございます、兄様。さあ、行こう！」

私は母様と兄様の手を掴むと、元気よく外へ飛び出した。

「こらこら。カラーン、そんなに急ぐと転んでしまうぞ」

「平気だもん！ あつ」

「だから言つただろう」

そう言つて転ぶ直前に私を抱き上げてくれたのは父様。

「えへへ。」「めんなさい。父様大好き！」

父様にギュッとしがみつくと、父様は肩車してくれた。

「さ、ちょっと急ぐぞ。今日は大事な儀式の日だ。遅れたら大変なことになる」

”黒ネコ族”の子供は7歳になると一人ひとり自分用の短刀を贈られる。”黒ネコ族”にとって短刀とは誓いをたてるときに使う神聖なものであり、自分の短刀を持つということは一人前と認められることだ。

「やつと族長の愛娘が7歳を迎えたんだ。今日の祝祭は盛り上がるぞ」

今回儀式で短刀を贈られるのは全部で11人。その中でも族長の娘である私は最後に父から短刀を受け取る。

「リュウセイが7歳を迎えた時のことを思い出すな。あの時も長男だということで盛り上がったな。今から楽しみだ」

「大丈夫だよ、カララン。別にそんなに緊張するものでもないから」「そうよ。ちゃんと”宣誓の言葉”は覚えたわね」

「はい！」

最後に短刀を受け取る者は、”宣誓の言葉”といって、”黒ネコ族”として誇りを守つて生きていくことを誓わなければならない。だいたい”宣誓の言葉”を言つるのはその儀式を受ける者の中で最も身分の高い者だ。

「三年前の兄様、かつこよかつたなあ。私も兄様みたいに頑張る」「そうそう。その意気だ。頑張れよ、カララン」

そうしていろいろうちに、儀式がおこなわれる”母なる洞窟”へとたどり着いた。この洞窟は”黒ネコ族”がすむ森の中でも最北端に位置し、儀式のとき以外では例え族長でも立ち入ることは許されていない。儀式を迎える子どもたちは、順番に洞窟の中へと入つて行き、その奥で待つ族長から短刀を受け取る。

「それじゃ、私たち先に洞窟で待つてあるから。リュウセイ、カラランを頼んだわよ」

儀式の準備をするため、父様と母様は先に洞窟の中へと入つて行つた。

「カララン、他の子たちはもう並んで待つてる。僕たちも行こう」

儀式を待つ子たちの中に混じつて一人でいると、急に不安になつて周りをきょろきょろと見回した。すると、兄様と目が合つた。兄様は優しく微笑むと、手を振つてくれた。それだけで、不安が吹き飛んだ気がした。

儀式の順番を待つ間、いろんな人から祝福の言葉をもらつた。それにいちいち笑顔で答えるのは疲れたけど、家族のためだと思って乗り切つた。

「次、族長の娘、カラーン」

「はい」

副族長に名前を呼ばれて洞窟の中へと入る。この先に父様と母様がいるはずだ。確かに受け取つて外に出たらそのまま演説台に上つて”宣誓の言葉”だったよな。頭の中で何度も繰り返し練習した言葉をもう一度復習する。洞窟の広場が見えてきた。もうすぐ私の儀式が始まる。

私とあいつ（後書き）

ちなみに、キャラの名前に漢字をあてると、

カラ
ン 花藍

リュウ
セイ 流星

ミカ
ゲ 御影

リア 李亜

となります。師匠にはもう一つ名前があります
るかと……。そのいつかの師匠へ

あの日から（前書き）

今回も過去の話がメインです。あの事件とその後の話です。

広場の奥の一段高くなつた所に、父様と母様がいた。二人ともにつっこりと笑つて私を待つてゐる。

「おめでとう、カラーン。さあ、儀式を始めるわよ」

母様がひと振りの短刀を捧げ持ち、それを恭しく父様が受け取る。父様は私のほうへと向き直ると、その短刀を私に差し出した。

「これは命を奪うものではなく、誓いを守るものだ。生涯をかけて己の誇りと大切な者との誓いを守れ」

「はい」

私は短刀を受け取ると、それを両手で抱え込むよつにして持つ。これで私は一人前として認められた。外でそれを宣言するため、私は出口のほうへと足を向けた。

「待て」

急に父様が私に静止の声をかけた。目を閉じて、じつと何かに聞き耳を立ててゐる。どんな音もたてちゃいけないような気がして、私は息をひそめた。自分でも耳を澄ませてみる。

「足音？」

儀式中、洞窟の中へは儀式を行うもの、行われるもの以外の立ち入りを固く禁じられている。よつて、一族のものではありえない。

「！？ 逃げる！ カラン！」

父様が何かから私をかばうように立ちふさがつた。瞬間何かが刺さる音がした。

「あ～、はずしちゃつたか。まあいいや。後は族長一家だけだしね」

「兄、様？」

父様を挟んだ向こう側にはそこにいるはずのない兄様が立つていた。その足元には母様が倒れていた。

「兄様、母様から血が出てる。早く助けてあげて！」

「何言つてるんだ、カラーン。これは僕がやつたんだよ。あの女ひとが復

活するためにには父上も母上も邪魔だったからね。もちろん、カラーン、お前もだよ」

「……、リュウセイ、やめる。実の、妹、だぞ」

「父上、まだ生きてらしたのですか？」しぶといですね

兄様が手の中でクルクルと短刀を回しながら私たちのほうへ近づいてくる。

「兄様やめて！ 短刀は命を奪つためのものじゃない、って父様が「何言つてるんだい、カラーン。短刀つていうのはね、こうこう風に使うためにあるんだよ」

「やめて！！」

私は父様と兄様の間に立つた。

「カラーンそのうち君にも分かるようになるよ」

その時、なぜ兄様が私の鳩尾に短刀ではなく手刀を叩き込んだのか、私はいまだに分からぬ。私の意識は一瞬で真つ暗な暗闇に飲み込まれた。

「あの後、私は父様と母様の遺体と一緒に発見された。そこには血のこびり付いた私がもうはずだつた短刀が落ちていた。そしてあんたは行方不明。その後は想像がつくでしょ。私は一族から追放された。親殺しの罪でね」

無意識にギュッとこぶしを握る。当時、何も訳が分からないまま森の外へ放り出され、何度も獣に襲われかけた。現在稽古場を持つほどの腕を鍛えだしたのはその頃からだ。

「何であの時私を一人と一緒に殺さなかつた！ あの時の苦しみは

……思い出したくもない」

何かから自分を守るように、自身の体を抱きしめる。足元に視線を落とし、寒気が消えるのをじっと待つ。そこでふと影が差した。

「お前が必要だつたんだ。強くなつたお前がな

急いで顔を上げると、至近距離にあいつがいた。そして、昔のよう

に私の頭を優しく撫でた。

「触るな！」

手を払いのける。不用心に相手を近づかせた自分の無防備さを呪つた。こいつの前だと調子が狂う。

「東の森へおいで。そこでお前を待つてる。すべてはそこが始まるから」

「待て、用事はまだ……」

どこかに隠し通路もあるのか、あいつの姿が一瞬で消えた。

「くそ。どうして私はいつもこうなのよ……」

自分の悪態をつきながらも、いつまでもここにいる必要はないので出口へと向かう。広場の出口に、人影があるのが見えた。

「終わりましたあ？ 今日は会えたみたいですが、また逃げられ

たんですねえ」

「私は洞窟の外にいると言つたはずよ、黒いの」

「それは僕の自由です。で、東の森に行くんですか？」

「行くしかないでしょ。さてと、いつまでもここにいたら他の奴らに見つかっちゃう。さつさと退散しないと」

「僕も行きますよ」

「結構よ」

黒いのをその場に残し、私は一人洞窟の外に出た。

あの日から（後書き）

次回、師匠（たち）は旅に出ます。あの子も再登場、……しますかね？ 次回からは「メイティ風にしたいと思います。シリアルは苦手だつ！

第2の故郷（前書き）

意外とリア君が好評だったので再登場します。相変わらず師匠にいじめられています。

第2の故郷

「ただいまー！ リア、元気にしてた？」

「師匠！？ お帰りなさい！」

まるで子犬のように駆け寄ってきたのは稽古場を任せているリア

だ。『白ネコ族』特有の白い尻尾をパタパタと元気よく振っている。こいつは生まれる種族を間違えたらしい。

「今日はわりと早かつたですね。これから稽古つけてくれるんですね

か」

「うーん、それがね、またこれからすぐに出かけなきゃいけないのよ。今回またマジで長期になるから一回顔見せに戻ってきたというわけ

「そんなん……。僕またお留守番ですかあ？」

いつもはポンと元気よく立っているリアの耳がしおれた。

「そんなこと言つてもね、リア以外に師範代任せられる奴いないしじゃあ、頑張つてね」

にっこり笑つて肩をポンと叩くと、リアはその場にしゃがみこんで地面上の字を書き始めた。可愛いからそのままにしておこう。「よし、お前らー。久々に私が稽古つけてあげるわ。順番に並びなさい」

稽古場の奥のほうでそれぞれ稽古していた少年少女たちが一斉に駆け寄ってきた。

「今日は師匠が稽古つけてくれるんですか！？ 僕が一番！」

私が、僕がと騒ぎ立てる子どもたちを眺めまわしてすっと深く息を吸う。

「順番！ 全員相手してあげるから、一人ずつ並びなさい！」

今度は素直に返事して一列に並ぶ子どもたち。先頭の少年が一步前に出てお願いします、と頭を下げる。

「あら、入ってきた時よりもずっと礼儀正しくなったんじゃない

「リア師範代は礼儀にだけは厳しいですから」

なるほど、あいつのおかげか。私が教えるよりもずっととい。

「リアも、何で私に習つてあんなに礼儀正しくなれたのかしら。奇跡としか言いようがないわね」

実際私が直接教えた奴らはリアを除く全員が礼儀もくそもない好戦家だ。まあ、リアも訓練だけなら組み手とかを嬉々としてやるのだが。礼儀関係も教えた記憶がない。

向かつてくる子どもたちに足払いをかけながらそんなことを考える。体制を崩した子どもたちを片つ端から投げ飛ばす。もちろん加減してだが。

「つて、ちょっとあんたたち！ 一人ずつって言つたでしょ！？」
稽古場はもう乱戦状態だ。背後からも誰かが近づいてくるのが分かった。

「甘いわよ、リア！」

背後から近づいてきたリアの腕をとつて投げとばす。

「ちえ、ばれましたか。さすが師匠です」

結構本気で投げたのに平然と受け身をとつて即座に立ちあがるリア。

「あんた、また強くなつたわね。師匠として嬉しいかぎりだわ」

「光榮です！」

そう言つていきなりリアが飛びついてきた。反射で受け止めてしまった。すぐに周りの子供たちが師範代だけずるい！ とかよく分からぬこと言つて一斉に飛びついてきた。

「お前らやめる！ 稽古にならないじゃない！ つか真面目に私死ぬ！！」

5、60人の子どもたちに押しつぶされて思わず悲鳴を上げる。

もうただのじやれあいだ。

「あなたたちは何やつてるんですか」

呆れた顔をして稽古場に入ってきたのは外で待っていたはずの二力ヶだ。

「あ、ミカゲさん！　お久しぶりです」

すぐにリアが反応してぴょこんと立ち上がる。せついえればこいつは一時期ここに稽古場に通っていたな。ちなみにリアの兄弟子。私が師範代にしようと思つていたら、やめていきやがつた。だから実力は実質リアよりも上だ。私には到底かなわないがな！

「そろそろ出発しないと日暮れまでに隣の村に着きませんよ。まあ、夜の森で狼たちと乱戦しながら行きたいのなら別にかまいませんけどねえ」

ミカゲが言う狼とは”狼族”のことだ。夜行性で私たち”ネコ族”とはあまり、というよりもかなり仲が悪い。夜の森をうろついていると必ずと言つていいほど襲われる。

「別に襲われても追い返すだけだから別にいいけど、面倒臭いわね。じゃ、私出発するわ」

まだ引っ付いている子どもたちを引き？がしながら稽古場の外へと向かう。バイバイ師匠！　とか言いながら手を振つて見送つてくれる子どもたち。……いい子どもたちをもつたわ、私。

ミカゲを伴つて稽古場を出ると、誰かが服の裾を思いつきり掴んだ。突然のことにバランスを崩しかけながらもその掴んだ相手を睨みつける。

「どうこうつもりかしら？　リア

「僕はダメなのに、ミカゲさんは連れて行くんですか？」

……ウルウルした目で上目遣いに見上げてくるのは反則だろ？！？　つて、いかんいかん！　可愛いからこそ今回は連れていつちゃダメだわ。

「ダメ。あんたにはあの子たちのこと守つてもらわなきゃいけないんだから。あいつらのこと頼むわよ」

最後に頭をポンポンと撫でて今度こそリアに顔を向ける。

「…………（あいつ付いてくるな）」

「……いい加減出できたら？　いるんでしょう、リア」
稽古場を後にしてかなりのスピードで歩く（いや、あれは走るだ
！　b ソミカゲ）こと3時間。足も止めず、振り向きもせずに背後
に声をかけた。

「……いつから気づいてたんですか？」

「あんたが私たちに追いついたころから」

「……最初からですか」

隠れることをあきらめたのか、消していた気配を元に戻してリア
は私たちに近づいてきた。

「子どもたちはどうしたの？」

「トーマさんに任せてきました。師匠たちが戻つてくるちょっと前
に、フラッシュと帰ってきてそのまま奥で寝てたんですよ」

「あいつ、帰つてきたの」

トーマとは私の弟子の一人で、確かに最年長のはずである。実力は、
私が一番最初に師範代に任命した男だから十分すぎるほどある。
「ま、あいつが帰つてきてるなら心配ないか。帰つてきたときに文
句を言われそうね」

トーマは何故かびっくりするほど私に似ていて、一人放浪の旅を
するのが好きなのだ。でも、責任感は強いほうだから、子どもたち
を放つてどこかへ行つてしまふことはないだろう。

「……帰りにトーマの好きな魚でも持つて帰つてあげるか」

第2の故郷（後書き）

トーマ 冬馬

です。ちなみに、16歳の”虎ネコ族”です。

そのほかのキャラをまとめてみると、

師匠 17歳

リア 12歳

ミカゲ 14歳

リュウセイ 20歳

です。種族は小説の中で説明したとおりになります。

怪しき集落（前書き）

今回も師匠は素晴らしい脚力を見せてくれています。番外編もち
よくつかよくアップしていきます

怪しい集落

リアと合流したところから歩いて（走って！　b yミカゲ&am
p.・リア）3時間ほどのところに、一つの集落があった。人（ネコ
？）の気配はなく、荒れた形跡もない。

「っしゃ！　取り放題！」

「いやいやいや、待ってください師匠！　それは悪役のセリフです
から！」

「えー、いいじゃない。誰もいないし。私に捨てて使われるほう
が道具も喜ぶわよ」

「どういう理屈ですか！？　そもそも変だと思いませんか？　こん
なにきれいに残っているのに誰もいないなんて」

「それもそうですね。普通は人が一人もいなくなるのは襲われた時
か、災害の時ですからね。どちらにしてもこれはきれいすぎますね
え」

「むう、あんたたち優秀すぎよ。誰から教わったの、そんなこと」

「立派な反面教師がいましたから」

「……それって、私？」

「人がほぼ同時にため息をつき、私に背を向けた。何よ、鍛えた
のは私じゃない！」

「リアの言つとおり、これはちょっと怪しそります。流行り病の可
能性もありますし、下手したら入った瞬間苦しむ羽目になりますよ
それは怖い。というわけで私はおとなしく一人の意見を聞くこと
にした。うん、私偉い。

そんなことを考えていると、ミカゲにすぐ冷たい目で見られた。
あいつ、私の心が読めるのか！？

「……貴女の表情は分かりやすすぎます」

「え、そうですか？　僕には全然分かりませんけど

「…………（鈍い師弟め！！）」

ミカゲがさつきよりも深くため息をついている。まあ、それは今に始まつたわけじゃないから放つておいてもいいか。

これじゃ誰が保護者か分からぬ、なんて聞き捨てならないことをぶつぶつ言つていいるミカゲを何とか無視（私偉い！）して、集落から少し距離をとりながらリアに聞いてみる。

「リア、何か聞こえるか？」

「いえ、特に何も。生きているものがいる音はしません」

私たちそれぞれのネコ族には特殊な力を持つ子供がたまに生まれる。リアもその一人で、彼は異常な聴力を持つ。ちなみに私とミカゲ、トーマも持つていて、私は視力、ミカゲは嗅覚、トーマは石や植物、ようするに自然界にあるものから記憶を読み取る。ま、意識して使わないと普通の奴らと同じなんだが。

「そうだな、私が“見て”も動くものはない

「いえ、何かいますよ。何か、……血の匂い？」

「何で疑問形！？ 血の匂いなんてお前一発で分かるだろ！」

「だから普通の匂いじゃないんですよ。たぶんここにいるのはネコじゃない」

ほんの少し、ミカゲの顔が引き締まる。珍しく緊張でもしてるのか？……それにしてもネコじゃないものか。森の中にこうやって集落を作るのはネコの一族しかいない。狼はそもそも大人数で生活するのを嫌うから集落を作るとは思えない。

「もともと住んでいた一族が何かに襲われたのか、それともその前に気がついて逃げ出したのか……。後者だといいな」

「そうですね。僕もここに住んでた人が無事だつたらいいなと思います」

「どうします？ 毒とかウイルスとかがいるような匂いはしませんし、入つてみますか？」

ミカゲが少し悪戯っぽい顔をしながら見上げてくる。これは私を試している顔だな。私の度胸、見せてやるうじやないの。

「なら入つてみよつか。ここ突つ切つたほうが次の村近いし

私の眼にはこの集落をまっすぐ突つ切つた先に村があるのがはっきりと見えていた。

「ちょっと怖くないですか？迂回しましょ、よ。……」

「お、怖がりだね、リア。かーわいい

「！からかわないでください、師匠！」

顔を赤くして拗ねているリアを笑いながら集落の中へと一步踏み出した。後にミカゲ、リアと続く。……数時間後、私たちはリアの意見を聞かなかつたことを後悔することになる。

怪しい集落（後書き）

補足

トーマ君の特殊能力、～記憶を読み取る力～

- 1・木や花、石に触れる。
- 2・意識を集中して知りたい記憶を探す。
- 3・記憶を覗かせてもらう。
- 例）リアがこの石に座つて花占いをしていた。「師匠は帰つてくる、帰つてこない、……帰つてこない！？」リア号泣。
- 4・可哀想な弟弟子を慰める。

巨大生物（前書き）

リア君は相変わらず可哀想な子です。
誤字脱字等を見ついた場合は、隨時直していくので指摘お願いします。

巨大生物

しばらく集落の中を探索した後、中央の広場（たぶん祭典用だろう）に集まって、それぞれの意見を交換することになった。

「私が見たところホントに何もないわ、」。きれいさっぱり人だけが煙のように消えちゃったみたい」

「僕も同じ意見です。地面を歩く音どころか、空気が動く音すらしません」

私とリアが頭を抱える中、黒いのが一人だけ氣難しい顔をしていった。

「おかしい。……」の匂いは一体どこから……？」

「何か分かるのか、黒いの？」

「だからミカゲですってば。……何か変なにおいがするんですよ。血のような違うような……」

突っ込むべきところはしつかり突っ込んで黒いのが答えた。さすがうちで一番の突っ込みだ。リアではまだ足りない。

「だいたい、何処から匂うのかもよく分からんんですよ。強いて言つなら、この集落全体から、でしきうか」

「うわ、やめてよ。地面掘つたらそこらじゅうから変なもの出でくるとか……。考えただけで寒氣がする」

「地面？……（うわあ、なんかすこくいやな予感が）」

「どうしたんですか？ ミカゲさん」

「リア、お前だけでも先に逃げ……！？」

黒いのがリアに何か言いかけたところで、地面が割れた。

「うわ、何だこりや！ 意外と深いな

「何変なところで感心してるんですか、師匠！」

「二人とも！ 落ちますよ！ 古畠まないよつに口を閉じて……！」

「自分で言つておきながら、噛んだね」

？」

「噛みましたね」

身体能力が総じて高い私たちは特に苦労することもなく、5mほど落ちて着地した。一人だけ私たちに背を向けて口元を手で押さえている黒いのは、まあ、アホなんだろう。

「ひはひ（痛い）。ひはんはつは（舌噛んじやつた）」

「僕、ミカゲさんがこんな間抜けだつたなんて、初めて知りました」「まあ、私の弟子だからね」

「なるほど」

納得するな！ と私は心中で突っ込んで、一人痛がっている黒いのを無視してあたりを見渡した。黒いのが言つたことが本当ならば、このあたりが匂いの元凶……かもしない。

「……師匠、何か聞こえます。何か、いま聞きたくないよつの音が……」

私もリアが見つめるほうへ視線をやる。しばらくすると、暗闇の先のほうに何かぬめぬめと光る、白っぽいものが見えた。

「ひつ」

隣でリアが小さく悲鳴を上げる。そういうえばこいつ、トーマに似て両生類とか爬虫類とか、ああいう系統のもの、すこしく苦手だったよな。

私たちの目の前には巨大なナメクジのようなものがいた。しかも体中から青い体液のようなものを撒き散らしている。

「気持ち悪……」

「なるほど、匂いの元凶はあれでしたか」

昔から私は目の前にいるものの小さい奴を持つてトーマやらリアやらを追い回しては、正直このサイズまででかくなると気持ち悪い。少なくとも積極的に触りたいとは思わない。

「黒いの、気持ち悪くないの？ 冷静に見えるけど」

「貴女に昔、散々これで追いかけまわされましたから」

だからもう慣れました、と相変わらず可愛くないな。黒いののくせに。

「どうする？ これやつつけないとたぶん」「から抜け出せないよ。ちなみに私は嫌」

「僕は絶対嫌です！」

「僕もできれば触りたくないですね……」

「こんな会話を繰り広げながら、私と黒いのと素早くアイコンタクト。悔しいがこいつは意思疎通というものがしやすい。」

「じゃ、公平にじやんけんで……！」

と口では言つておきながら素早くリアの両手を掴む。ちなみに黒いのは両足を抱えている。また黒いのとアイコンタクトして無言でタイミングを合わせる。

「じゃ、リア、頼んだわよ！」

「普段仲悪いのこ、何でこんなときだけ息ぴったりなんですか！？」

何かリアが泣き「とを言つてこいたような気がするが、いつものことなので無視した。

巨大生物（後書き）

次回、リア君の可哀想なターンが続きます。

新たな敵（前書き）

やつとりア君が解放されたと思つたら、また敵です。久々に師匠の真面目モードが入ります。常にふざけてるからな、師匠つて。たまには真面目になつてもらいました。

最近はミカゲ君も師匠と仲良くなつてきました。もともと師匠はミカゲ君のこと大目に見てるんですよ。照れ屋なんです。好きな子はいじめたくなるというあの原理です。

新たな敵

「嫌ーーー！」

「ほら、頑張つてリア！」

「早くしないと暗くなつて出られなくなりますよ」

巨大ナメクジにリアが挑み始めてから早3時間。リアは逃げてばかりで戦いになつてない。リアの背後の壁際に並んで座つた私と黒いのは時々面白がつて声援という名の茶々を入れる。

「私、こんなナメクジに負けるような鍛え方をした覚えはないわよ！」

「そんなこと言つたつて！ 嫌だ、こいつ気持ち悪いです！ 触りたくないし触られたくない！！」

「もう、しょうがないわね……」

「お、師匠のお出ましですか」

立ち上がつた私に反応する黒いの。その黒いのを上から見下ろしながら私は不敵に笑う。その顔を見た黒いのが顔を引きつらせる。……さすがは一時期私の弟子をやつていただけはあるわ。いい勘して

「行きなさい、黒いの！」

「えー、僕が行くんですかあ？ ここは可愛い弟子を助けるために師匠が出る場面ではないですか」

「師匠命令よー！」

「もうとつくて貴女の弟子ではなくなりましたけどね。……仕方がない、困つた師弟ですね」

そう言つて懐からやや大ぶりのナイフを取り出して立ち上がる黒いの。

「リア、ちょっとそこどいてくださいーーー！」

リアが黒いの前からどいた瞬間、地面をけつた黒いのがもうナメクジの目前まで迫つていた。そのままナイフを一振り。一撃でナメ

クジを沈める。

「黒いの、もう一度道場戻つてきて師範代やる気はない？」

「嫌です」

あっさり、しかもさわやかスマイル付きで黒いのは言い切った。ここまで綺麗に即答されると帰つてきてもない相手だとしてちょっとムカつくわね。

「何よ、私だつていらあんたが「はい、ストップです」

私がちょっとキしたのを感じたのか、リアがストップをかけてきた。さすが弟子。自分の師匠のこと良く分かってるわあ。

「ミカゲさん、僕の代わりに倒してくれてありがとう」ひれこました。おかげで助かりました

必殺、リアの天使の微笑み。^{ハニジル・スマイル}

この技は老若男女を問わず、すべてのネコに通用する。試したことは無いが、たぶん狼にも効くだろう。もちろん、脇で見ていた私にもしつかり効いている。可愛いなあ。

「……まあ、文句は後でしつかりと、然るべき相手に。とりあえず上に戻りましょう」

黒いのは少し下がると、助走をつけて跳んだ。続いてリアも。：

「足自慢の若いのはいいわ。二人とも元気ね。

「何やつてるんですか、師匠！　早く来てください。これくらい師匠なら余裕でしょ？」

「えー、私も跳ぶの？　リアたちが引っ張つてくれないの？」

「ふざけてないで早く上がってきてください。いつまでもそこにはるとまたナメクジがきますよ。あと2、3匹分くらいの匂いがします」

「それを早く言いなさいよ！」

私は助走無しでそのまま軽く5mほど跳ぶ。余裕で穴を抜けた私を黒いのとリアがジトつとした眼で見つめる。

「……元気じゃないですか、師匠」

「…………（相変わらず嫌な人だ）」

あれで僕たちより強いんだからー、とかリアと黒いのが一人で愚

痴つてゐる。何よ、これでも私はあんたたちの師匠よ。これくらいで出来なきやあんたたちの師匠なんか勤まらないわ。何か文句ある？私が一人拗ねていると、突然リアの耳がピクッと動く。とたんに目を細めて辺りをうかがう私たち3人。さつきまでの弛んだムードは何処へ行つたのやら、全員の顔が厳しいものへと変わつていた。

「東方、1、2……10匹？ たぶん狼です」

「みたいね。10匹なんてそんな大勢でいるところ初めてみたわ。とりあえずこの人数であれを相手するのは面倒ね。隠れましよう」私の眼ははつきりと東からやつてくる狼たちの姿が見えていた。

「あいつらが来るのが東からじゃなかつたら先に進むんだけど……」私たちはもと来た道を音を立てずに駆け戻る。集落の外に出ると、各自手頃な木に上り、姿を隠す。木の葉のおかげでこちらからは狼の様子が確認できるが、あちらからは見えないだろ？

東からやつてきた狼たちは私たちが落ちた穴を覗き込むと、リーダー格つぽい狼が口を開いた。

「いいか、お前ら。ナメクジの溶け具合からまだ奴らはこの辺に居るはずだ。探せ！」

あのナメクジ溶けるのか！ つて、突つ込むところはそこじゃない。あいつら確かに、奴らはまだこの辺にいる、と言つた。奴らとはもちろん私たちのことだらう。

「……まずは」

狼たちは総じて鼻がきく。最初から私たちを探すつもりなら匂いでこちらにすぐ気がつくだろ？

私たちと狼の距離、100m。

新たな敵（後書き）

次回、ちょっと話はシリアルスに。物語が少し進みます。新キャラも出る予定です

双子の狼（前書き）

新キャラ登場です。とはいってもほとんどしゃべりませんwww
そして師匠が大暴れします やつぱり強いです、師匠は。

双子の狼

「師匠、どうしますか？」

「どうするも何も、やるしかないでしょう。ちょっと面倒だけど。あんたたち一人で4人潰しなさい。後は私がやるわ」

「大丈夫ですか？」

「……なめてんの、黒いの？」

いちいちムカつく黒いのは放つておいて、狼たちの背後をとるため、気配を殺しながら移動を始める。幸い私のほうは能力のおかげで敵を見失うことはない。

「さて、誰から潰そうかしら？」

今は誰もいなくて空き家となっている建物の影に隠れて、敵が近づくのを待つ。じぱりすると、一匹近づいてくる。あいつからでいいか。

「！？」

不意を突いて敵の口を塞ぎつつ、影に引っ張り込んで鳩尾に手刀を叩き込む。声もなく沈んでくれた。しかも周りは気がつかなかつたらしい。

周りをこつそりうかがつてみると、あっちもちょうど一匹沈めたところなのか、リアが親指を立ててウインクしてきた。……いちいち可愛いなあ、もう。

そのまま続けて2人ほど沈める。このあたりで相手も異変に気がついたらしい。

だがもう遅い！！

今までいた場所を離れ、敵に気がつかれないようリアたちのもとへ行く。口の動きだけで伝える。

「（リーダー沈めてくるから、後頼む）」

「（了解です）」

……いつか役立つだろ？と思つてこの訓練させておいてよかつた

わ。あの時は単なる遊びだったのに。

私が元の場所に戻つてあいつらに合戦すると、二人は同時に別方向から飛び出す。それぞれ一番近くにいた相手を掴み、投げる。そしてそのまま4人まとめて乱戦へ持ち込む。

……我が弟子ながら良い腕してるな、こいつら。

私のほうもただ見とれているだけではなく、行動を開始する。リアたちに気を取られているリーダー格の奴の背後へ回る。さすがリーダー、私が背後に回つた時点で気がついて振り向いた。

……だから、もう遅いんだって。

「セツ！」

気合いともに回し蹴りを放つ。……あ、掴まれた。でも、

「甘い！」

掴まれた脚を軸に体をひねり、全体重を乗せた回し蹴り。……蹴るのつていいよね。スッキリ

私の渾身の一撃を防ぎきれるはずもなく、側頭部にクリーンヒットする。そのまま崩れるリーダー格。大したことないわね！！

「師匠！ 終わりましたか？」

「今終わつたところよ。そつちは？」

「それが……」

振り向くと、そこには困った顔をしたリアと黒いのが居た。そして、そのやや下に視線を向けると、

「どうしましょう、この子たち」

一目で狼族のそれと分かる犬耳を頭に乗せた男の子と女の子が正座していた。しょんぼりと頃垂れている様を見ると、つい抱きしめてしまいたくなる。

「……これだから貴女は」

黒いのの声で気がついた。私は狼族の一人をまとめて抱きしめていた。だって、可愛いんだもん！！

「あんたたち、名前は？」

「……フィア」

「……フイイ」

「……双子？」

同時に「くつとうなずく双子。女の子のほうがフイアで、男の子のほうがフイイね。

「あなたたち、狼族よね」

「くつり。

「もしかして親いない？」

「くつり。

「私たちと行きたい？」

「くつり。

よし、連れていいつー！

フイアとフイイの手を掴んで立ち上がる。そのまま進もうとして、リアと黒いのに止められた。

「なんでよお。いいじゃない。この子たちが戦つ気なもんがつだし、可愛いし」

「可愛いの関係ありませんからー。狼族の子を連れていくなんて、正氣ですかー？」

「なあに、リア、嫉妬お？ 今まで可愛い系は自分だけだったから、かまつてもらえなくなると思つたんでしょう。大丈夫よ。ちやーんとかまつてあげるからー」

「違いますつてー！ それと誰が可愛い系ですかー？ かまつてほしいなんて一言も行つてませんー！」

「いや、リアは無言でかまつてと言つてこるようなものですからねえ」

「ミカゲさんまでー？ 誰か僕の味方はいないんですかー？」

「うわーー！ と叫び声をあげているリアも双子と一緒に懷に抱え込むと、じつと見つめる。

「……そんなに見つめても、僕はその中に入りませんから

「冷たい」

「どうとでも言つてくださいー」

一人離れたところで拗ねている黒いの（拗ねてない！　bヨミカ
ゲ）は放つておいて、腕の中の三人を力いっぱい抱きしめる。

「ムグウ、し、師匠、苦しい、です」

腕の中リアのうめき声が聞こえた。じつやら力を入れすぎてしまつたらしい。よく見ると双子も顔を真っ赤にして息苦しそうだった。

「うわあ、『じめん』『めん』

手を離したとたん、ゼヒハアと荒い息をつく三人。……お、双子の表情が少し柔らかくなつた。落ちついてきたのかな。

「やつと解放されて安堵しているんですよ。いくら狼族とは言え、子供を殺すつもりですか、貴女は。自分の力の大きさをしつかり理解してください」

「うへ、『ごめんさい』

黒いのに怒られた。でも悪いのは私なのできちんと謝る。双子ちゃん、ごめんね。リアも。

「だいたい、貴女は今ちょっとテンション上がりすぎです。落ちついてください」

……しうがないよ、それは。だって双子ちゃんが可愛すぎるんだもん。

双子の狼（後書き）

双子ちゃん、次回からは緊張も解けたのか、ちゃんと喋りますついでに襲撃者たちの謎も明らかになるかと。

ぬこひの筆跡（前書き）

双子ちゃん……可愛いい……
自分で書いておきながらいつのまにどうが……。

あいつの策略

狼の双子が落ちつくまで少し休憩し、一人が落ちついたところで事情を訊くことにした。

「あのねー、ファイアたちはある人に頼まれて来たのー」

「来たのー」

「誰に頼まれたの？」

「ファイアたちには分かんないー」

「分かんないー」

先に話しているのがファイア、後に繰り返しているのがファイ。可愛いんだけど、若干うざいな。慣れるまでの辛抱か。

「で、あんたたちはどうするの？ 狼族のところに戻る？」

「それは絶対に嫌ですー」

「嫌ですー」

双子が泣きながら抱きついてきた。そんなに辛かつたのだろうか、狼族の中での暮らしえ。

さすがに小さい子供が泣きついてくるのは情に訴えるものがあるらしく、リアと黒いのの顔は幾分か柔らかくなつていた。

「私たちはお父さんもお母さんもいないからね」

「いつつもいじめられてたの」

「でもね、今回の”さくせん”で”おでがら”たてたらね」

「族長さまがお父さんの代わりになつてくれるって言ってたから」「自分たちから志願したのー」

「したのー」

私たち3人は言葉を失つた。こんなに幼い子供が自分の身を守るために自らこんな危険な作戦に加わったというのだ。その族長がどんな人物なのかは知らないが、おそらくこの双子は騙され、利用されている。

「私たちと一緒に行こう。大丈夫。お姉ちゃんはとーつても強いの

よ」

そう言つて一人を抱きしめると、一人はにっこりと笑つた。

「ありがとう、お姉ちゃん」

「フィイたちも何か役に立ちたい」

「ありがとう、その気持ちだけで十分よ。リアに黒いのも文句ないわね」

振り返りながら聞くと、一人とも首を縦に振つた。

さて、と。出発する前にもう一仕事するか。無言で黒いのが太い縄を差し出してきた。気がきくな、こいつ。リアも見習えよ。私はまだ気を失っているリーダー格をこれでもかというほどきつく縛りあげた。まだ起きないので軽く頬をはたく。そこで呻きながらリーダー格が目を覚ます。

目を開けること数秒。自分の状態を確認して自分の状況を理解したらしい。話が早くて助かる。

「さあて、洗いざらい吐いてもらいましょうか？」

「…………師匠、目が悪人です」

「貴女の辞書には手加減という言葉がないのですか？」

「敵に対してはね」

「（絶対にこの人だけは敵に回したくない）」「

何もしゃべらないが、気配だけで双子もおびえているのが分かる。敵に女という理由でなめられるわけにはいかないからね。このぐらいがちょうどいいのよ。

「…………と思つたら、

「まったく貴女は……。相手が怯えて口もきけなくなつてゐるじゃないですか。代わってください。僕がやります」

何やら不気味な笑顔を浮かべた黒いのがリーダー格を連れて私たちから離れていった。何するつもりだあいつー？ あんな生き生きとしている黒いのは初めてみた……。

妙にぐつたりとしたリーダー格と、妙に肌がつやつやとしている黒いのが戻ってきた。ホントに一体何があつたんだ！？

「だいたい分かりましたよ、敵が」

「大丈夫か、お前……」

思わず敵のほうを心配してしまった。声をかけても放心状態でピクリとも反応しない。もとは仲間だつたはずなのに双子は怖がつて近づこうともせずリアの後ろに隠れている。ムムツ！ いつの間にリアに懐いたんだ、この二人！

「どちらかといえば、残念なお知らせになりますね。僕の予想が正しければですけど」

「誰が依頼人か分かったのか？」

「まだ僕の予想ですけどね。……たぶん、”あの人”が関わつてます。こいつも実際に依頼人の顔を見たわけではないそうなので、あくまで僕の予想になりますけど」

「……真相は進んでみないと分からぬ、か」

黒いのがいつになく真剣な顔をしているから、私をからかつて楽しんでいる可能性は低い。

もしあいつが関わつているなら、この先少し慎重に進まなければならぬだろう。

「何がしたいんだよ、あいつ」

そこには不思議そうに私を見上げる双子が居た。

おこつの策略（後書き）

次回、隣村に入ります。

女の方の樂しみ（繪書き）

今日は盤匠が珍しく女の手仕事です。そしてまたリアは可哀想な子です。

師匠の二つ皿の名前も出します。

女の子の楽しみ

「やつとつこいた。結構ぎりぎりだつたわね」「隣村についたのは日も暮れかけたころ。双子を連れているといひを狼族に見られてたら面倒なことになつてたわ。双子はそこそこ大きな村に来るのは初めてらしく、きょろきょろとあたりを見回している。

「フィアとフイイは村に来るのは初めて?」

「狼は村とか集落とか作らないから、今日あの集落に行つたのが初めてなのー」

「のー」

「人がたくさんいるつてことは、何か作戦でも実行するのー?」

「うん、相変わらず弟はほとんど喋らない。にしても、作戦を実行するときしか人が集まらないなんて、この一人は一体どんな暮らしを送つてたんだ?」

「でも、作戦とかで人が集まるようになつたのは最近のことなのー」「それまではみんな自分の思つままにやつてたのー」

「それつて、どのくらい前なんですか?」

「うーんとね、2、3週間くらいー」

「いー」

それを聞いた黒いのの眼がほんの少しだけ、視覚強化した私だから気がつくほど少しだけ、険しくなつた。だがそれもすぐに消えて、もとの何も感情の無い眼に戻る。

……そういえばこいつ、眼に感情が浮かぶことつて無いな。ふざけている時も、笑っている時も、怒っている時も眼だけは何も感情が浮かんでいない。唯一浮かぶのは私とあいつが対峙した時と、今日みたいに詰問（拷問か？）したときだけだな。

「師匠、もしかして何かまずいことでもあるんですか?」

「ううん、別に何もないわよ。ただ、ちょっと急がなきゃいけないかも。まあ、今日はもう移動するのは無理だと思うけど」

私は双子とリアに眼を向ける。何だかんだ言って、今日の強行移動は幼い体にはきつかったらしい。なんていつたって、リアだつてまだ12歳だしね。

「あ、そういえば、双子ちゃんは何歳なの？」

「12ですー」

「ですー」

嘘、このちびすけたちリアと同い年か。この3人を並べてみると、リアって結構大きいほうだったんだな。私も黒いのもわりと背は高いほうだから、全然気がつかなかつた。

「リア、良かつたわね。貴方はもうチビじゃないわ」

「だからいつも言つてたじやないですか！ 比べるもの間違えてたんですつて！」

懐かしいな、トーマと一緒にリアをチビチビ言つて追いかけまわしたのが。

「とりあえず、今日はこの村に泊るわよ。黒いの、どつか適当に宿屋探してきて。汚いとこと高いところ嫌よ！」

「相変わらず貴女は人に何か頼むときにつけて注文が多いですねえ」

そうブツブツ文句を言いながらも黒いのは宿屋を探しに行つた。あいつのことだから5分ほどでいい宿屋を見つけてくるだろう。匂いか？匂いで分かるのか？無駄にそんな能力がある黒いのであつた。

「さてと、私たちは私たちで買い物しちゃうわよ」

「買い物？」

「物ー？」

「そうよ。あんたたちのその耳を隠す帽子とか、私たちについてくるならそれなりの服とか用意しなきゃいけないからね」

まだ日が完全に落ち切つていないから双子はちらちらと見られる

だけで済んでいるが、日が完全に落ちれば狼族のスパイだとか言って村を叩き出されるだろう。いくら私たちがついていてもだ。

そして数分後、リアとフライ、そして途中から合流した黒いのは地獄を見ることになる。

「見てみてフライア！ これ似あうんじゃない？」

「あ、それもカワイイのー！」

満面の笑みで露店を眺めて回る私とフライア。そしてその後ろを荷物を抱え、辟易した顔でついていく男性陣3人。しかし女性2人は気がつかない。

「セーラさん、この黒いのと緑の、どっちが似合いますかー？」

「うーん、フライアだつたら緑かな？」

「じゃあ緑色にしますー！」

嬉しそうに緑色のマントを抱えて店主の元へと掛けていくフライア。やつぱり女の子だつたんだな。

セーラというのは私の名前。10年前に捨てた名前の代わりに私が自分でつけた名前だ。もつともこの名前で呼んでいるのは現時点でのフライアとフライの2人だけだが。

「あのー、師匠？ そろそろ必要な物はそろつたんじゃないですか？ そろそろ宿屋に……」

「そうね、じゃあ……」

私の言葉に無言で顔を輝かせる男3人。そんなに嫌だつたのか、買い物が。その3人を見つめたままにやりと笑う。とたんに顔が凍りつく3人。

「じゃあ、今度は楽しいウインドウショッピングと行きますか」

「…………」

「ホントですか？ やつたー！」

無言で何かを諦めたような顔になる男3人と、両手を上げて無邪

「気に喜ぶフィア。……でも、小さいフィイにこれ以上つき合わせるのは酷かな？」

「でも、フィイは疲れたみたいだから黒いのと一緒に先に宿屋に行ってなさい。黒いの、宿屋の場所は？」

「ちょっと待つてください、師匠！ 僕は！？ 僕もフィイと同じ年なんですけど！ 僕もかなり疲れたんですけど！…」

「あんたは私があんだけ鍛えたんだから平氣でしょ。荷物持ちになりなさい」

「鬼…………！」

「フィアちゃんもいるんですから、あんまり遅くならないでくださいね。リア、頑張ってください」

最後に本当に嬉しそうな顔で久々に笑つた黒いのが半分眠つているフィイをおんぶして先に宿屋へ向かった。

「さーて、今日はいっぱい買つぞー」

「おー！」

「やめてください！」

そしてその日、満面の笑みを浮かべた私とフィア、そして疲れ切つた顔で両手に荷物を抱えたりアが宿屋に入つたのは日もすっかり落ちて、そろそろ黒いが探しに行こうかとしていたころだつた。

女弟子の樂しみ（後書き）

セーラ 青蘭

本当は蘭で”ら”とは読みませんが、片仮名にしたときセーランは
ちょっと……とこつわけで、セーラとさせていただきました。
ちなみに何故師匠の一つ目の名前がセーラか分かりますか？ ヒン
トは元の名前です。

答えは次回のあとがきででも書きますかね。

追手（前書き）

暴力シーンはなるべくせりつと書いていきたいと思います。一応これ、戦闘モノじゃないんで。（今更）作者は暴力反対です。（じゃあ書くな）

翌朝、まだ日が昇りきつていらない時間に私は起きた。軽く壁を「コツコツ」と叩いてから一緒に寝ているフィアを起こす。

「フィア、起きなさい。そろそろ行くわよ」

「ふわあ。おはよついでねこまます……って、まだお外真つ暗ですよー？」

まだ眠気が去つていないので、少し舌つたらずなフィアが田をこすりながら抗議する。

「次の村がちよつと遠いから、少し早めに行くのよ。ほら、早く着替えて」

フィアを急かしながら支度を済ませ、まだ田をこすつていいフィアを半ば引きずるように部屋を出る。

「遅いですよ。リアとフィイイ君は先に村の出口に向かわせました。こいは僕が交渉するので先に行つていてください」

「ありがと。や、行くわよ、フィア」

宿屋を出ると、まだ眠いらしにフィアを背負つて村の出口に向かって走り出す。……それにしてもこの子軽すぎじゃない？ 今までちゃんとじい飯食べてたのかしら。

村の出口近くの家の物陰に、膝を抱えて丸くなつているフィイイと、その傍に立つているリアが見えた。やっぱりフィイイのほうも眠かつたらしく。

「あ、師匠。おはよついでねこまます。フィアちゃんもやっぱり駄目だつたみたいですね」

「まあ、まだ小さいから仕方ないわよ。もう少し寝かせてあげましょう」

「……僕も同じ年なんですけど。ついでにまつと小さじ頃起き起されて田が覚めるまで虫とか持つて追いかけまわされたんですけど」

「……あれは、うん、そう、訓練だから」

「まあ、おかげですぐに起きれるよくなつたのでいいですけど、主にトラウマで」

「どうやら私は幼いころのリアの心ことでつもなく大きな傷跡を残していたようだ。ま、結果オーライ？」

「よくないですよ。僕以降の子たちにそんなことしないでくださいよ。ファイアちゃんとかフイイとか」

リアが私と双子の間に立ちふさがる。いい度胸してんじゃない。

「ふーん。僕以降……ね。じゃあ、リアはいいの？」

「え、ち、違つ！ そういう意味じゃなくて……！」

「いい加減貴女はリアをいじめるのやめてください」

「あら、黒いの。遅かったわね」

いつの間にか黒いのが呆れた顔で後ろに立っていた。黒いのにも気づかないなんて、私もちよつと度が過ぎたかしら。

「まったく貴女って人は。子供じゃないんですから、いい加減限度つてものを覚えてください」

「つたぐ。分かったわよ。相変わらずあんたは固いわね」

「誰のせいだと思つてるんですか、誰の」

「あー、何にも聞こえないー」

私は耳を押さえて顔を背ける。後ろで黒いのが貴女はガキですか、とか言つてるような気がするけど無視。

「じゃ、出発するわよ。黒いの、フイイを背負つてあげなさい。リアは全力で走れるわね。私はファイアを背負つてくから」

2人とも黙つて首を縦に振つてこたえる。

私はファイアを背負うと、黒いのがフイイをきちんと背負つてスタンバイしているのを確認すると、指を3本立てて軽く振る。腕を元に戻した瞬間から心の中でカウントを開始する。3……2

……1……。

0、と心の中でカウントすると同時に地面を強く蹴つて家の影から飛び出す。同じタイミングでリアと黒いのも飛び出しているはずだ。

ちゃんと付いてきているか気配だけで確認して前方に目を凝らす。

(10か。多いな)

走る速度は緩めないまま、腕を固定したまま指を一本立て、左右に10回振る。後ろの2人が同時にうなずくのが気配で分かる。それを確認すると同時に、私はフィアを背負い直し、道のわきに続く森の中へ飛び込んだ。と同時にリアと黒いのもそれぞれ左右の森の中へと飛び込んだ。

「リア、あんたは黒いののほうへ行きなさい。こつちは1人で大丈夫だから」

「分かりました」

私の後についてきたリアに一言だけ指示を出すと、私は目の前を凝視する。……こつちは女だと思つて甘く見てるわね。4匹くらい軽いわ！

「 ッ！」

無言で気合を入れて目の前に見えた1匹に飛び蹴りをお見舞いする。その間にも走る速度は落とさない。続く3匹も回し蹴りと飛び蹴りで沈める。

周りに残りがいなことを確認して道に戻ること数秒、黒いのとリアも道に戻ってきた。

「遅かったわね。あんたたちもまだまだね」

「う、やっぱり師匠には敵わないです」

「それよりも黒いの、そつちはどうだつた」

「貴女の読み通り、全員狼です。たぶん昨日の夜から街の外に張つてた奴らと同じです」

「で、宿にいた奴らは？」

「全員沈めて村の広場に置いてきました。朝になれば村の人たちが気がついて何とかしてくれるでしょう」

「？」

私と黒いのの背中ではようやく起きたらしい双子が双方訳が分からぬ、といった顔できょとんとしていた。

「これは私の推測だけど、さつき沈めた奴らはあんたたちの次の作戦実行部隊よ。昨日の夜から村の外と宿屋に張つてたから早めに出てきたってわけ」

「多分この先、まだ追手は来ると考えたほうがいいでしょうね」「仕方ないわよ。あいつは昔つからしつこい奴だつたから」小さいころの記憶なんてとっくに捨てたくせに、とか何とか黒いのが言っていたような気がするが、たぶん氣のせいだらう。私たちはだんだん明るくなってきた道をただひたすら次の村を目指して駆けていた。

追手（後書き）

これは暴力ではありません。アクションです。きっと。グロいシーンとかは絶対に書かないようにしているので、もし何か気がついたことがあれば、感想でお願いします。

道の途中（前書き）

年下組は可哀想です。

「そろそろこいいかしらね」「そう言つて私はフル回転をせっていた足をとめた。それにならつてリアと黒いのも足を止める。
私はもちろん息ひとつ乱れていないが、黒いのとリアの息はかなり上がつていた。

「何よ、あんたたち。だらしないわね」

「ゼエ、ハア……。貴女は相変わらず化け物ですね……。フウ……」

黒いのの息はだいぶ整つてきたようだ。それに比べてリアは、

「ハア、ハア……。な、んで……フウ、ふた、りは……平氣、何です

か……」

「男の子のくせにだらしないわね。特にリアは誰も背負つてないでしょ」

「だからって、8時間連續走破つて、……フウ、ヒドイじゃないですか」

追手を振りきつたのがだいたい午前3時くらいだから、今は田も高くまで昇り、もうすぐ昼時になる。

「つたく。帰つたらじい」を直してやるわ

「そんなん

私は止めていた足をまた動かし始めた。いつまでもこんなところで立ち止まつてはいるわけにはいかない。

「だいぶ息も整つたでしょ。行くわよ。早くしないと日暮れ前に村につかない」

「それもそうですねえ。さ、リア、行きますよ

「えつと、ミカゲ？ 僕降りて自分で歩くよー？」

ミカゲの背中でたつぷりと眠つていたらしいフィイが元気いっぴいになつたらしく、降りる降りると騒いでいる。

「だ、そうですよ。背中空くのでおんぶしてあげましょうか？ リ

ア

「結構です！！」

明らかに楽しそうな顔をした黒いのと、顔を真っ赤にするリア。いちいちそんな反応をするからみんなに遊ばれるのだということにいい加減気づかないもんなのかな。

「フィイが降りるなら、フィアも降りますー」「

フィアもそう言いだしたので、降ろしてやつた。

地面に着地すると、フィアは私に向かって深く頭を下げた。

「セーラさん、ありがとうございますー」

「いいのよ、お礼なんて。それにフィアはすっごく軽かったから全然辛くなかったよ」

「でも、ありがとうございます。フィイもお礼言つた？」

「ミカゲさん、ありがとうございますー」

「僕もお礼なんて要りませんよ。年上としては当然のことですから「年上なら、当然、ですか……」

リアが珍しく拗ねている。1人だけそっぽ向いている。顔を90度とちょっとくらいひねつて歩いてるのによく転ばないな。

「あ、つぶな」

あ、転びかけた。でもさすがの運動神経でリアは転ぶ直前に体勢を立て直した。さすが私が鍛えただけあって体のバランス感覚と反射神経は素晴らしいわね。

「リアの課題はあと体力かあ。また追いかけまわす？」

「遠慮します。体力はしようがないですよ。僕はまだ成長期ですか

ら

「あれ、僕がリアくらいのときはもう1-2時間連続走破とか余裕でしたよ

「ああ、そうだったわね。黒いのは昔から武芸に関しては天才だったわ」

「まあ、そうは言つても貴女に勝てたことなんて結局一度もありませんでしたけどね」

黒いのに關しては確かに私が教え始めたころからもう天才的だった。ほんの数カ月でトーマと並んでしまったほどだ。でもトーマもそこら辺にいるようなレベルではないので、黒いの相手に引けを取つたことは一度もないが。

「リアは帰つたら一日50キロ走ること。帰ればしばらく私も道場に入れると思うからチビたちの相手は私がするわ。……あ、トーマに任せてもいいのか。どちらにしろあなたは自分の修行に専念しなさい」

「5、50キロ……。分かりました」

今までリアは連續走破30キロまでしかしたことがない。いきなりハーダルが上がつてビビつてゐるんだろう。

「なあに、ビビつてゐるの？」

「そ、そんなことないですよ」

「ね、セーラさん、道場つてなんですか？」

「かー？」

どうやら双子を放つておいて3人だけで盛り上がり上がつてしまつたらしく。反省反省。

「道場つていうのはね、私が武道を教えてるとこさよ。いつも見えても私、師匠なのよ

自慢げに耳をぴくぴくと動かした。

双子は目をキラキラと輝かせて笑いついてきた。

「セーラさん、オシシヨー様なんですね！」

「強いんだー！」

「ファイアたちも教わりたいですーー！」

「すー！」

私はあごに手を添えて考える。確かに今は私たちが守つてあげら
れているけど、これから先ずっと守つていられるとは限らない。自
分の身は自分で守れることにこじたことは無いだろう。

「分かったわ。これから先何が起くるか分からぬし、自分の身く
らい守れたほうがいいわよね」

「やつたー！」

「たー！」

私の周りをぴょんぴょん跳ねながら喜びを表す2人。その2人をリアと黒いのの2人が微笑ましげに見ていた。……リア、お前は同じ年だろ？。

「そうね、でもあんまり時間はないし、村の外で教えるのは今はちよつと危険ね」

「なら、各村で一泊ずつして、1日ずつ教えればいいじゃないですか。1日は移動、もう1日は稽古。それでどうですか？」

「ナイスアイディアよ、黒いの。双子もそれでいい？」

「「らじじゃーです！」」

双子が可愛らしくそろつて敬礼する。

こうやって並べてみると、この双子がすつゞく似てこむことに気がつく。もしかしたら、フイアが髪切つて短くなつたりビビリがフイアでフイイになのか分からぬかも知れない。

「そうと決まれば、次の村まで走るわよー！」

「え、また走るんですか！？」

情けない声を上げるリアは無視して私と黒いのはそれぞれフイアとフイイを抱き上げる。

2人で目配せしてほぼ同時に走り始める。

「そんな、ちょっと待つてくださいよ。ミカゲさん、師匠つたらー！」足は早いが持久力がないリア君は、結局1人だけ村に遅れて着きましたとぞ。

道の途中（後書き）

誤字脱字、または文章の流れ的におかしい、前までと言葉遣い、呼び方が違う（今まで僕だったのに俺になつてている）など、何か気づいた点がありましたら、お知らせください。

作者もたまに読み返して見つけ次第直していますが、1人じや限界があります（泣）

皆様のご協力、お願いします

素直な気持ち（前書き）

たぶんこの辺で折り返し地点かな、なんて思つてます。
師匠たちは何処まで行くんでしょうかね。

「遅いわよ、リア」

結局リアが街に着いたのは日も暮れかかったころだつた。手を膝について肩を大きく上下させ、必死に息を整えているリアは、顔を上げるのもしんどいらしく下に向けたまま反論した。

「し、師匠たちが卑すぎるとですよ。何時着いたんですか」

「そうね~、お昼じろかしり

「早つ！？」

リアが一瞬呼吸するのも忘れて驚きの声を上げた。当然、直後にむせたように咳を繰り返す。息乱したまま呼吸止めて声上げるからだぞ。

「大丈夫ですか？ ちゃんと持久力つけなきゃダメですよ

腹を抱えて笑っているだけの私とは違つて、黒いのはリアの背中をさすつてやりながら言つ。

「うう、頑張ります……」

「……何よ、リア。黒いのが相手だと随分と素直じゃない

「人柄、の問題でしうか？」

「黒いのは黙つてなさい……」

睨みつける私と平然とその視線を受ける黒いの。

「喧嘩はダメですー」

「すー」

と双子に割り込まれた。とたんに私の相好は崩れる。こんな可愛い子たちを間に挟んで喧嘩なんかできるわけないじゃない。

「……貴女は相変わらず子供好きですねえ」

黒いのにため息をつかれるが無視。可愛いものは可愛いのだ！

「とりあえず、リアが来る前に黒いのが宿見つけてくれたから、そつちに移動しましょう。入口で騒いで悪目立ちするのもあまり良くないしね」

というわけで、私たちは一斉にそろそろと宿屋へと移動する。そのほうが目立つて？ そんなの知らないわよ。

黒いのが見つけてきた宿屋はそこそこ大きくて、さもありまなネコが入り乱れている。

一番の魅力はその庭で、かなりの大きさを有している。これだけの広さがあれば、早朝でも他のネコにあんまり迷惑をかけずにチビたちの修行ができるわ。

双子は着いた途端、目を輝かせて庭へと走り去つて行つた。それを微笑ましげな顔で見送る3人。

「あら、リアは一緒に行かなくていいの？」

「こんなときだけ同じ年齢で扱うのはやめてください！！！」

「遠慮しなくてもいいんですよ、リア。そのためにこの宿を探したんですから」

「ミカゲさんまで！？」

すっかり落ち込んでしまつたリアをその場に置いて、私たちは宿屋の中へと入つて行く。

入口のところでふと思つたつて、振り返る。

「リア～、双子の面倒よろしくね！」

「えー！？」

さらに拗ねてしまつたリアを黒いのと2人でニヤニヤしながら眺める。お前も相変わらず意地が悪いな。

宿屋に入り、黒いのが確保した庭に面した部屋へ移動する。窓を開けて外の様子をうかがうと、ちょうど双子がリアに駆け寄つて行くところが見えた。

何だかんだ言つて、リアも同じ年の子供が旅に加わつて嬉しいのだろう、笑顔で双子を迎えていた。

「目の保養だわ～」

「貴女は何を気持ちの悪いこと言つているんですか」

「気持ち悪いとは失礼ね。事実じやない」

「…………（ハア）」

何か思いつきり軽蔑の目を向けられたけど、気にしない。私は強い子！

「とりあえず、今後のことだけ確認しましょつか」

黒いのが私の正面に回り込んで座った。その真剣な顔を見て私の表情も自然と引き締まる。

「とりあえず、報告を先に。リアが遅れた理由は貴女も分かっていますね？」

黒いのの問いかけに、私は即座に首を縦に振る。
いくら体力がないとはいえ、リアは私の弟子だ。半日近くも送れるわけがない。

ならなぜ遅れたのか。理由は簡単。襲われたのだ。

時間的には私たちがちょうど村に着いたころ。私の目にはぱっちら見えていた。この目つてけつこう便利よね。

「多分そいつらが狼の第3部隊と考えていいでしょ。匂いではすでに村に第4部隊が紛れ込んでます」

「あいつもだいぶ本気ね。ここまでしつこいと逆にあきれるわ」「で、あの3人はどうするんですか？　まさか最後までは連れていきませんよね」

「……そのつもりだけど」

「貴女つて人は……！」

思いつきり黒いのにため息をつかれた。

「貴女はあの人リ亞たちを会わせるつもりですか！？　あんな危険な人に！」

「落ちつけ、黒いの。会わせるとは言つてない。そのために黒いの、お前を連れてきてる」

「僕を？　……まさか！？」

「あいつには私一人で会いに行く。3人を頼んだわよ。リアもいるし、あんたと2人でなら私が戻るまで双子を守れるでしょ」

「それはダメです！」

めったに言葉を荒げるどころか興奮することが無い黒いのが、珍

しく興奮している。というか初めてみたぞ。

「何のために僕が貴女についてきたと思つてゐるんですか。少しくらいは僕を頼つてください」

「十分頼つてるわよ。信頼してなきゃあの3人を任せんなんてできないわ」

まだ何かを言いたそうな黒いのを口で制して、私は視線を外に向ける。あの子は耳がいいから全部聞こえちゃったかな？

「東の森まではあと5日で行くわ。次の村で一緒にいるのは最後よ。その村での子たちを守つてちょうだい」

黙つている黒いのの肩に手を伸ばし、ポンポンと軽く2回たたく。そして立ち上がると私は外に向かつた。

「絶対に、帰つてきてください」

すれ違ひざまに軽く服の裾を引っ張つて、黒いのが小さく囁いた。それに私は軽く微笑んで応えると、そのまま外に出た。

「当然よ」

たまには可愛いこともするのね、なんてことを考えながら、笑みを抑えきることができないない類を手で押さえながら、私はチビたちを呼び戻すため、日も落ちてだいぶ暗くなつた外へと足を踏み出した。

素直な気持ち（後書き）

なんか、フラグたちました。
師匠は大丈夫なんでしょうかね。作者にも分かりません。
そろそろお兄さんのほうも本格的に動き出す頃でしょうか。

双子ちゃんの意外な一面。作者もびっくりしました。何故そんなものを隠し持つてた！？リア君は安定の可哀想なポジションです。

翌日の朝、宿の庭からは元気な声が聞こえてきていた。

「うわあ！ すじいですー！」

「すー！」

歓声を上げているのは双子のファイアとファイイ。そして元気に悲鳴を上げているのが、

「師匠！ 何で僕まで！？ ちょっとは手加減……って、うわ！」

リアだった。

「何よ、リア。私はまだまだ本気なんか出してないわよ。ほら、頑張んないと双子ちゃんに呆れられちゃうわよ」

「そんなこと言つたつて！ つと、ハツ！」

リアが気合いと同時に右足の低い蹴りを入れてきた。私はギリギリのところで一歩下がつてスルリとかわす。先ほどから攻撃がかすりもしないことに、早くもリアは涙目になってきている。

「ほーら、リア。さつきから一度も当たつてないわよ。よく私の動きを見なさいー！」

「もう！ いじめですよ、これ！」

今度は左から回し蹴り。これも軽くステップを踏んだだけでかわす。

「もうヤだ」

すっかり戦意を喪失してしまったリアは、動きを止めてしまう。

そのままその場にしゃがみこんでの字を書き始める。

「じゃ、次は双子ちゃん達もやってみましょうか。さつきのリアみたいにやらなくてもいいから、とりあえずファイアは私、ファイイは黒いのと組み手にしましょうか」

「え、僕もですか？ 貴女一人で十分対応できますよね」

「あんた師範代から逃げたでしょ。その代わりだと思つてやつときなさい。それとも何、私と組み手がやりたいのかしら？」

「謹んで」「遠慮させていただきます」

素直で優しい。

早速私とフイアは向き合つと、一礼した。「これはマナーね。

「じゃ、どうからでもいいわよ。うまくやれつとしなくていいから」「はいです！　じゃあ、遠慮なくいきますー」

と、フイアがそういうと同時に腰を低くすると、思いっきり地面をけつた。結構なスピードで突っ込んでくる。……これは真剣に相手しないとどつちかが怪我する。

隣の様子を見ると、フイイも同じようなもので、若干表情を引き締めている黒いのが見えた。

「ねえ、フイア？　もしかしてどつかで格闘技とか習つてた？」

「うんと、そうですね。この前の作戦に参加する2週間前くらいに一通り教わりましたー」

「ましたー」

律儀に反応するフイイ。双子パワー、恐るべし。……にしても2週間でこのレベルか。この子たち、実は天才なんじゃないの？
そんなことを考えながら相手をしていくと、先ほどまでうずくまつていたリアが急に立ち上がり、すたすたと宿の中に入つていつた。

「ちょっと水飲みに行つてきますね」

入り口のドアからひょつこつ顔だけ出してそつこつと、今度こそ中へと消えた。

「あの子は耳いいからね」

「まったく、本当にそうですよ」

リアのようになりの音が鮮明に聞き取ることができない分、私と黒いのは気配を読む力を鍛えている。中には気配を消すことができるものいる（例：師匠）ので万能というわけではないが、だいたいの人数、種族程度なら分かる。

「どうします？　中断しますか？」

フイイの蹴りを受け流しながら黒いのが尋ねてくる。

「うーん、リア一人でも大丈夫じゃない？」

私もフィアの蹴りからの裏拳を身をよじってかわしながら答える。

「よし、終わり！！」

私の合図で動きをピタリと止めるフィアとフィイ。その様子を見て私の背中に嫌な汗が流れる。

2人は私たちと出会う前に2週間だけ訓練を受けたと言った。しかし、そんな短い期間で動きをピタリと止められるようになるのはほぼありえない。だいたいこの年の子供というのは、合図があつても夢中になつていたりして動きを止められないものだ。現にリアでも止められるようになるまで1ヶ月はかかった。

それをたつた半分の2週間で。

動きのほうも半端ではない。少なくとも1年は毎日休まず稽古を続けなければならないだろう。

「……あんたは一体どんな子供を仕込んでんのよ」

私の咳きが少し聞こえたらしく、フィアが不思議そうな顔で私を見上げてくる。そのフィアに何でもないよ、とこうように軽く首を横に振つてみせ、宿のほうへと視線を向ける。ちょうどビリアが戻つてくるところだった。

「遅いわよ。いつたいどんだけ水飲んできたのよ」

「すいません。思つたよりも多くコップに注いぢやつて、飲みきるのに時間がかつちゃいました」

「ちゃんと後片付けしてきた?」

「はい。それはきちんと」

上出来だ。やっぱり弟子が優秀だと師匠は楽でいいわ。鍛えた甲斐があつたわね。

「じゃ、双子ちゃんの実力も分かつたことだし、今日の稽古はここまでにしましょうか」

「えー、なんか師匠、フィイとフィアには甘くないですか」

「この子たちにはこれ以上訓練は必要ないわよ。それとも私の判断には不満?」

「そういうわけじゃないんですけど」

「なら黙ってなさい」

嫌な汗をかくほどの実力だったのは秘密だ。これなりこの先私が

いなくともリアと黒いのの足を引っ張ることはないだろ。

「そうと決まつたら今日は一泊ゆつくり休んで、明日には出発するわよ。リア、黒いの。あんたらは何とかして稼いできなさい」

「またですか……」

「…………」

「くら節約しようとも、宿やら食べ物やらで金は必要になつてくる。やうに今回は人数も増えてるので、今のうちに稼いでおいたほうがいいだろ。ちなみに私は何もしない。弟子任せ。

しぶしぶ宿を出でいくリアと黒いのを見送つて、私は部屋のベッドにダイブする。稽古つけた後のこのベッドがたまらなく気持ちいいんだあ。

ちらりと脇を見ると、同じように双子ちゃんもダイブしている。うん、そうだよね。気持ちいいよね。

今日は朝早くから起きていたせいか、しばらく見守つていると双子ちゃんはすやすやと眠り始めた。私も規則正しい寝息を聞きながら、いつの間にか眠つてしまつていたらしい。

夕方に帰つてきたらしいリアと黒いのに大量の殺氣を浴びせられ、飛び起きたのはまた別の話。

次回、突入！！
え、しない？ しないの？

師匠「だつてめんどいもん」

話進まないから！！ お願いです。動いてください。

……それと、リアの「水飲んでくる」の意味、分かりました？ 分

かりましたよね。水＝敵、飲む＝倒すです。

翌朝、まだ日が昇りきつていない時間に動く5つの影があった。
もちろん、私たちだ。

「今日はちょっと遠いけど、今日中に隣村まで行くわよ。いいわね」
一斉にうなずく4人。それを確認すると、私は隣村に向かつて走り出す。

隣村に着いたころにはもう日が沈みかけていた。道中特に襲撃もなく、逆に私たちの警戒は強くなっていた。

「つたく、あいつも相変わらず酷い心理戦しかけてくるわよね」

「本当にそうですね。ここまで警戒して何もない、精神的疲労もかなりのものになりますし」

あいつを知らないリアと双子はキヨトンとしている。

「ま、何もないわけがないんだけどね。たぶんあいつはこの森にいるはずだから」

「その、あいつ、ところの師匠の何なんですか？」

リアがちょっとと聞きにくそうに尋ねてきた。

「……兄よ。認めたくないけど」

「師匠の、お兄さん……？」

初めて聞いたリアはとても驚いた。そもそも私がいたことすら知らないのだ。当然の反応だろう。

双子もかなり驚いたらしく、フリーズしている。まさか自分たちに襲うように指示したトップが、自分たちが襲つた人の兄だったとは思いもしなかつただろう。

「ま、誰であろうと近日中にけりをつけるわ。距離的にも近いわけだしね」

「……師匠。絶対に、1人で行こうとかしないでくださいね」

「…………」

「……ハア。やっぱり。僕も何年弟子をやつてると思つてんですか。

それくらい分かります」

何でこう私の弟子たちはそろいもそろつてこう察しがいいのかしら。ちょっと鍛えすぎ? でもこればかりは譲れない。リアたちが私を一人で行かせたくない、と思うよつに、私もリアたちを連れていきたくないという思いがあるからだ。

「あんたちは連れて行けない。ここに残つてなさい」

「何ですか!? 僕たちはそんなにも足手まといですか! ?

「そうじゃない!!」

珍しく怒鳴つた私に、一瞬、部屋が静かになる。ハツとして4人の顔を見ると、そこには今にも泣きそうな顔をしたリア、ただ静かに私の言葉を待つ黒いの、訳が分からなりなりにも心配そうな顔をするフイアとフイイがいた。

「嫌なのよ。自分の面倒事に他人を巻き込むのが。10年前につづきれなかつた決着のせいで誰かが傷つくのなんて、見たくない」

「師匠……」

「分かつたら私を1人で行かせて。もうこれ以上私のせいで傷つく人は見たくない」

私の両親のように、誰かを死なせたくない。これ以上、兄に人を殺めさせたくない。それが唯一残された肉親に、唯一私ができることだから。

「黒いの、リア。フイアとフイイを頼むわよ

まだ泣きそうな顔をしていたが、リアはもつ何も言わず、しつかりとうなずいた。黒いのも同様にうなずく。

私はしゃがみこんでフイアとフイイに視線を合わせると、ゆっくりと語りかけた。

「私が面倒みるつて言つたのに、こんなところで放り出してごめん。でもちゃんと戻つてくるから。それまであの2人と一緒にいてくれ

る?」

「ファイア、セーラーさんのこと、ずっと待つままでー」

「ファイイもー」

「うん。ありがとー」

双子がにつこつと笑うのを見て、私は立ち上がる。

「さすがに夜から森に入るには危険だから、明日日が昇つたら入るわ。それまでに買い物済ませちゃうわよー」

「また買い物ですか」

そう言つてリアが笑つた。その目元に光るもののが見えたが、私は見なかつたふりをした。

「そうよー。昨日リアと黒いのが稼いできててくれたから、久々に甘いものでも買っちゃおつかしく」

「甘いものですかー?」

すかさず反応したのはファイアで、こんなとこりは女同士通じ合つものがある。

「よし、行くわよー」

「おーー!」

「おーー!」

私の掛け声に元気よく応えたのはファイアとファイイ。リアと黒いのはやれやれ、といった風に私たちを見ていた。

明日、単身森に乗り込む。そのことを考えると気が重くなるが、努めて明るくふるまつた。

「……大分遠くまで来ちゃつたな。まったく、誰かさんのせいで楽しい旅も、かたつ苦しこことこの上ないわ」

小さく愚痴つていると、田ざとい黒いのが視線だけで問い合わせてきた。私はそれに首をすくめて答えると、さつく街へと繰り出しついでいた。

再会と初対面（前書き）

お兄ちゃん、登場！
そして、師匠突入！

師「お兄ちゃん、その女^{ひと}誰！？」
兄「すまない、俺はこいつが好^{すき}い……」「続きはWEBで
……」

……嘘です。

再会と初対面

太陽が昇りかかるころ、私は一人ごそごそとベッドを抜け出す。着替えを手早く済ませて持ち物を確認する。

一通り準備を済ませた後、最後の仕上げとばかりに10年前にもらった短剣を腰に差す。10年前の決着をつけるなら、これは必要不可欠なものだろう。

「じゃ、行つてきます」

一緒に部屋で寝ていたフィアの頭をなでる。ぐっすりと眠ったフィアは起きる気配もない。

私はその様子にくすりと笑うと、静かにドアを開けて部屋を出る。

「随分と早いわね？」

「大丈夫です、ひきとめたりはしません。ただのお見送りです」「師匠、気をつけてくださいね」

ドアを開けると、そこには黒いのとリアがいた。黒いのは笑顔で、リアは半分涙目で、それぞれお見送りの言葉を言ってくれる。

私は一人の頭をそれぞれガシガシとやると、黒いのは少し迷惑そうな顔、リアは嬉しそうな顔をする。

「無事に帰つてくるから、チビたちを頼むわよ！ あ、リアもチビだつたか」

「チビは余計です！！」

そこは間髪いれずに囁みついてくるか。よしよし、元気だな。

「うし、じゃあ行つてくるわ。あとよろしくね」

そう言つて、私は宿屋を出た。

……あ、フィイの顔見てくるの忘れた。

「……何なの、この禍々しい気配は。一体何が巢食つてゐつていう

のよ

私は必死に以前ここを訪れたころの様子を思い出していた。見た目は変わりない。それは断言できる。けれどそこには渦巻く空氣というものが酷く濁っていた。

「これじゃあ、何にも住めないわね」

鳥や虫たちも逃げ出してしまったのか、辺りには時々風が木々の葉を揺らす音しか聞こえない。つまり、無音。

「入りたくない……」

けれど入らなくては何も始まらないので、嫌々森の中へと足を進める。

枝を踏んだり揺らしては笑えないでの、慎重に足を進めていく。ここは森の中だから気をつけなきゃいけないものはいっぱいあって、すぐ神経が疲れる。

森に入つてから3時間も経つただろうか、前方に広場のよつなものが見えてきた。その手前50mほどのところで立ち止まる。私はそのぐらい遠くても余裕で見える。目がいいからね。

「あれは、あいつ？ その傍にいるのは……」

広場の一番奥、土が一段盛り上がつたところに、あいつ、兄と見たことがない女の人がいた。

広場のこちら側には一目で狼族と分かる者たちが適当に座つてくつろいでいるのが見えた。普段群れることがなく、一目で”黒ネコ族”と分かるあいつが目の前にいるのにくつろいでいるその光景が、私にはとてもおかしなものに見えた。

私がじっと觀察していると、ふとあいつが立ちあがつて狼族のやつらに声をかけ始めた。……ばれたか？

私が冷や汗をかきながら一層息をひそめていると、あいつはどうやら狼族の奴らを並べているみたいだつた。しかし、普段群れない奴らがよくこんなにもきれいに整列できるもんだな。

あいつは狼族を、真ん中に通路を作るかのように広めに間を開けて並べさせると、自分はまた奥の女の人の背後に控えるように立つ

た。

「さて、みなさん。今日はいい天気ですね」
急に女人人が喋りだした。その声は50m離れている私にもはっきりと聞き取れるほどよく通り、高すぎず、低すぎない聞いていてとても心地いい声だつた。

しかし、あの人は一体誰なんだろう。パッと見た感じ、ネコでも狼でもない。初めてみるタイプだ。

その時私は気付いていなかつた。その女人の目が、はつきりと私を捉えていたことに。

「今日はですね、うふふ。いい天気の日にはぴつたりの、素敵なお客様が来ていますよ」

「え」

気がつくと、私はその広場にいる全員と目が合つてしまつていた。

「あ、あはは。どうも、ここにちは」

もう笑うしかない。あいつが近づいてくるのをただ呆然とその場で見ていた。逃げようにも足が動かない。

「彼女は彼の妹さんなんですよ」

私が女人の隣に連れてこられると、そう紹介された。彼とはあいつのことだろう。

一斉に集まる好奇の視線。隣を見ると無表情のあいつがいた。

「じゃ、あたしの目標は達成されたので、しばらく用はありません。帰つていいですよ」

女人のその言葉に、素直に立ち去つていく狼族たち。何者なんだ、この人は。

狼族が全員立ち去ると、女人は私に向き直つて改めて口を開いた。

「改めまして。初めまして、カラソさん。あ、今はセーラさんでし
たつけ？ あたしはルーパス」

「ルーパス……？」

どこかで聞いたことのあるよつたな名前だつた。一体どこで？ 思

い出せ、今すぐ思い出せ！

「多分、族長の書斎の本であたしの名前を見たんじゃないかしら？ リュウセイもそこで知った、って言つてましたし」

私の表情からよんだのか、さらりとルーパスさんが答えを教えてくれた。つて、何私はほのぼのと会話してんだ！？

「まあ、すぐに気がつかないのはしょうがないですね。もともと男の名前ですし。ね、リュウセイ」

黙つてうなずくあいつ。こいつってこんなに無口な奴だったつけ

？ つい1週間ほど前に会つたときは大違いの口数の少なさだ。やばい、こいつをのしに来たのにだんだん心配になつてきた……。

「彼の心配よりも、自分の心配をしたほうがいいんじゃないですか？」

「自分の心配つて…… あやつ」

見事にルーパスさんに足払いをきめられて地面に倒れこむと同時に、上から押さえつけられる。のんびりと会話していた私がうかつだつた。

「敵地のど真ん中で油断なんかしてちゃダメですよ？」

……ごもつともです。私はどうやつてこの状況から切り抜けようか、必死で頭を働かせていた。が、次にルーパスさんの口から出てきた言葉に、私はそのまま固まつた。

「その身体、お借りしますね？」

再会と初対面（後書き）

ルーパス何者！？

次回、過去の裏話。

眞実（前書き）

いける。 いけると思つたんだよお（泣
これを読んでくださつた友人の皆様が、

「これはなぜ残酷描写の警告が無い…？」

と寄つてたかつて苛めるんです（笑

さすがにこの回からはアウトだらうとこう作者の自口判断（自重と
もいう）により今回から残酷描写ありの警告を入れさせていただき
ました。

内容的にはほぼ変わりません（たぶん）ので今まで同様楽しんでい
ただけると幸いです

「身体を……借りる?」

「そうよ。あたし、こつ見えても靈体なんですよ? それで、このリュウセイに協力してもらつているわけです」

「この目の前でしつかりと実態を持つてゐる人が靈体? そんなわけあるはずが……。」

「カラーン、俺が1週間前に言つたこと、覚えてるか?」

今までずっと黙つていたあいつが急に口を開いた。1週間前……、北の森であいつに会つた時か? 確か強くなつた私が必要とかどうとか言つてたな。

「始まりは10年前。俺がこの人に出会つたときからだ」

そう言つて、あいつが静かに語りだしたのは、10年と少し前。私の7歳の儀式の前の出来事だった。

「坊や、どうしてここに来たの?」

「何か嫌な気配を感じた。あんたが僕の父上や母上、妹や族民たちを傷つけるような奴だつたら容赦はしない」

僕はそう言つて3年ほど前に父上から頂いた短剣を構えた。本来この短剣は人を殺めるためのものではないが、まだ幼い僕にはこれしかなかつた。

「あらあら、坊やはあたし相手に随分と気が強いのね。気にいつたわ

「僕はお前に気にいられる筋合いなど無い!」

「うふふ。200年ぶりだから、坊やみたいに小さい子があたしのこと知らなくても当たり前ね。もつともあたし、200年前は男だつたけど」

突然、田の前にいる女が怖くなつた。200年前。以前は男。その単語が頭の中でぐるぐるする。どこか、どこかで僕はその単語を目にしている。その正体を知つている。

「あら、坊やは頭もいいみたいね。あたし、賢い子は好きよ」
田の前にいるのは何の武装もしていない、非力な女のはずで、僕のほうは短剣を持っている。それなのに僕はこの女の目の前に立つていることすら恐怖を覚える。

「いい、坊や。あたしの名前はルーパス。”神狼ルーパス”よ」
「あ……」

思い出した。“神狼ルーパス”。それは狼族の実在する神であり、もつとも残酷で残虐な神。その身体は200年前にこの北の森の“母なる洞窟”に封印されたと、父上の書斎にあつた本には書かれていた。

「ちょっとごめんなさい」

すぐ近くでしたその声にハツとして意識を前に戻すと、至近距離にルーパスの顔が見えた。

「痛つ！」

一瞬痛みが走つた右腕を見ると、一本の赤い傷が手首から肘のあたりまで走つていた。また視線を前に戻すと、そこには赤い液体を手につけ、それを舐めとつてているルーパスがいた。

「お前、族長の息子か……！」ついさっき田覗めたばっかりだと言うのに、なんて運がいいんでしょう！　お前、名は何と言つ？」

「……リュウセイ」

「うふふ、いい子ね」

ルーパスはもう一度僕に、今度はゆっくり近づくと、頭を優しく撫でた。頭が撫でられたところからぼーっとする。

「そう、明日妹の7歳の儀式なの。それで、あの洞窟で儀式を行つね。そこには族長たちも揃つ……」

何でそんなこと、この人が知つていてるんだろう。そう思つていたら、急に僕の声が聞こえてびっくりした。どうやら僕が全て喋つて

しまつたらしい。

「いい、リュウセイ。貴方はもつあたしのもの。あたしの言うことしか聞かない」

僕、何かいけないと喋つちゃつたような気がする。でもさつきから頭がぼーっとして、ルーパスが何言つているのかもよく分からぬ。

「リュウセイ、よく聞いて。あたしはここに200年も閉じ込めた貴方の先祖が憎い。できれば復讐したいわ。でもね、今のあたしにはそれができないの。何でか分かる？」

父上、母上、カラム。ごめんなさい。

「あたしが力を発揮するためにはこここの族長の存在が邪魔なの。いくらこの200年で族長の力が衰えたといつても、200年前にあたしを封印した者の末裔だから。だからね……」

もう眠い。このままここで寝たら、僕はこの人に殺されちゃうのかな。

貴方の家族を全員殺しなさい

カラムだけは守らなくちゃ。僕の大切な妹。

そこで僕の意識は途切れだ。

眞実（後書き）

お兄ちゃん、そんな過去があつたなんて……！
これからお兄ちゃん大活躍（の予定）です
頑張れお兄ちゃん！

「何よそれ、聞いてないわ。そんな、じゃあ私が今まで生きてこれたのは……」

「そ。貴女のお兄さんのおかげですよ」

その言葉は私の10年間持ち続けたあいつへの恨みを否定するもの。私の存在の根底にあるものを否定するもの。

「1番憎いと思つてた奴に私は生かされてたの？」

屈辱。

「」の2文字だけが私の頭に浮かんだ。まさか自分がいつか倒すと息巻いていた奴に生かされていたなんて思いもしない。私の10年分の恨みはどこへ向ければいいの？

「……あの時私も一緒に殺してくれればよかつたのに……」

そうすればこんなに辛い思いをしなくても済んだ。10年もかけてやつと唯一の肉親を倒す決意が固まつたのに、その決意を簡単に粉々にされ無くても済んだ。

混乱する私を、あいつはただ淡々と、だけどじこか悲しそうに黙つて見つめ続けた。

「そんなこと言わないであげてください。リュウセイは私の暗示を自力で解いてまで貴女を救つたんですよ？ いくら力が本調子に戻つていなかつたとはいえ」

「暗示？ 自力で？ ……兄様、それはどういう意味ですか？」

「……やつと昔と同じように呼んでくれたな。意味はそのまんまの意味だよ」

私はハッとして口元を押された。混乱しそうで昔の呼び名が出てしまつたらしい。羞恥で頬が赤く染まる。

そんな私をルーパスさんはニヤニヤと、あいつは少しだけ嬉しそ

うに見つめていた。

「兄妹仲よろしく話しているといひで悪いのですが、あたしの話もしていいですか？」

ルーパスさんのその一言であいつが黙る。必然的に私も黙ることになる。ちょっと癪に障るが。

「ホントは身体を借りるだけならリュウセイでもよかつたんですけど、今あたしは女性の姿をとつているわけです。男性の身体つて合わないんですね。この前もちょっとリュウセイで試してみたんですけど、結局リュウセイの身体のほうがもたなくて……」

そこでルーパスさんが私に体重をさらにかけた。思わず息が詰まる。

ルーパスさんが私の顎を掴み、無理やり自分のほうを向かせる。私と目が合うと不気味に笑つた。私の背中にゾクリと悪寒が走る。「受け入れる。あたしの存在を。あたしの意志に服従を誓い、その身体を差し出せ」

決して脅している口調ではない。ただ淡々と用件を述べている。それだけのはずなのに、思わず自分の全てを投げ出してしまいたくなるような、鋭い威圧感。

この時初めて私は、相手は自分では到底及びもしない存在なのだと思い知つた。

「……これくらいにしておいてください」

意外にもルーパスさんを止めたのはリュウセイだった。

「これ以上はカラランの身体がもちません。折角見つけたものを早々に壊すつもりですか？」

「それもそうですね。ではまた今度にします。気をつけてお帰りください」

そう言つてルーパスさんはあつさつと私から身体を離すと、そのままどこかへ消えてしまった。

私があっけにとられてその後ろ姿を見つめていると、リュウセイもその後へとついていった。

「兄様！」

私がそう呼び掛けると、リュウセイはその場に立ち止まって、ゆっくりと振り返った。その顔は何も感情を映しておらず、私はその顔に寒気を感じた。

震えだしそうになる身体を叱咤し、身体を起こしながら私は問つた。

「兄様、私はもう一度あなたに近づいてもいいの？」

すると、リュウセイは少しも躊躇だそぶりを見せずに口を開いた。

「否」

それだけ言って、リュウセイは私に背を向けた。私は黙つてその背を見送つた。

私の視界から消える直前、リュウセイは振り向きもしないまま言った。

「例え操られていたとしても、俺はお前の両親を殺したことには変わりない。お前しか救えなかつた俺をお前だけは憎み続けてくれ」そしてリュウセイは私の視界から完全に消えた。

「これ以上、兄様を恨むことなんてできないよ。……」

リュウセイが私のことだけは守るうとしてくれたこと。その事実を知った今ではもうリュウセイを恨むことはできない。彼が純粋な殺戮衝動だけで両親を殺したと思いこんでいたからこそ、肉親であり、大好きだった兄を恨み続けることができた。

あふれ出でくる涙を抑えることができない。

私は10年ぶりに声を出して泣いた。

10年間我慢し続けた思いが、あとからもあとからもあふれ続ける。

恨み。悲しみ。憎しみ。後悔。怒り。そして愛。

これらの全てがごちゃまぜになつて、涙となり、あふれ出す。

「父様、母様、兄様……」

ようやく涙が止まつたのはもうすっかり日が落ちて真っ暗になつたころだった。

震える足を叱つづけて、なんとか広場をあとにした。

「何で來てるのよ」

森の入口には仏頂面の黒いのと、今にも泣きそうなリアがいた。
「師匠、あんまり帰りが遅いから心配で……。師匠、泣いたんですか……？」

「私のことはいいの！ それよりフィアとフィイはどうしたのよ」「ちゃんと寝かしつけてから来ました。貴女との約束は守りましたから、これからは僕個人の勝手です」

「あんたたち……」

口ではそう言いながらも、嬉しい気持ちが抑えられない。私には10年かけて見つけた仲間がいる。

「何があつたのかは聞きません。今見たことも無かつたことにします」

「……あんた生意氣よ」

私は最初に一応そう言つてから、黒いのの肩に顔をうずめる。黒いのは私を優しく抱きしめてくれた。

「今日は何もなかつたことにします。だから師匠も明日からまつもの師匠になつてください」

リアはそう言つて私の背中を優しく撫でた。

もう枯れたと思っていた涙が、あとからあとからあふれ出していく。私はどこか冷静になつた頭の片隅で、そのことに驚いていた。

「さ、待つてる人いますし、早く帰りましょう」

私の涙が止まる頃合いを見計らつて、黒いのが、いや、ミカゲが声をかけた。

その言葉に私が顔を上げると、珍しくニヤニヤとミカゲがリアと笑い合っていた。私が不思議そうにその様子を見ていると、リアが口を開いた。

「帰つてからのお楽しみです。日が昇りきるまでに宿に行きますよ
そう言って、白み始めた空を見つつ、私たちは3人肩を並べて走
り始めた。

フラグー！

次回、あの人超久しぶりに登場！？

？？？「みんな、俺のこと覚えてるよな！？」

懐かしい顔（前書き）

あの人再登場。懐かしい。懐かしすぎます。
……というか、本編では名前しか出てないんだよね。この人。作者
が可哀想過ぎて番外編の主人公にしちゃうほど、出番が少ない。
思い立つて、ここで再登場させてみました。

「よお、師匠！ 久しぶりだな！」

「な、あんた、何でここに来てるのよー？」

宿屋に戻つて一番最初に見たのは、図々しくも私のベッドに寝そべり、片手をあげて挨拶してくる”虎ネコ族”的少年、トーマだつた。

私はトーマをジトつとした目で見つめると、あらうことか本人は笑いながら私に話しかけてきた。

「何だ、道場の奴らが心配か？」

「当たり前じゃない！ あんたが面倒見てたんじゃないのー？」

「うん、まあ、そうだつたんだが。いろいろあつてな……」

「そつなんです、師匠！ トーマさんつたら木とか石とかが言伝に師匠が危ないつて聞いていてもたつてもいられなくてここまで來たそうですよ」

「とは言つても、ちよつと遅かつたみたいだけどな

「んなことどうでもいいわ！ 私つて、そんなに信用ないかしら？」

トーマはちよつと困つたように考えてから、また口を開いた。

「信用とこうか、師匠つて妙なところで自分の中に溜めこんじやうから心配とこうか……」

酷い言われようである。私は一応自分の中で抱え込み過ぎないようとにかく息抜きもしていふところだ。

「んなことあんたたちに心配される筋合いはないわよ。それよか道場の子供たちのほうがよっぽど心配だわ」

「それこそ心配される筋合いはねーよ。あいつら、師匠が思つてゐほど柔じやねーぞ」

そんなこと分かっている。私といつらが育てたんだから。戦闘能力、生活能力、全てにおいて信頼はしている。ただ、子供を置いていく母親の気持ちというのだろうが、信頼と心配はまた別のもの

だ。

「……なんてことあんたらに言つても分からないんだりつな」
トーマだけでなくミカゲとリアまで頭の上にはてなマークを浮かべてゐる。

「ま、これを機会に子離れするか……。ホントに大丈夫なんでしょう?」

トーマをジトツとした目で見る。トーマは当然とでもこいつのような顔で答える。

「そもそも師匠は心配し過ぎなんだよ。俺は当然として、ミカゲやリアを始めとしてあいつらを見てくれば分かるこいつたう。ホントは師匠が一番分かってんだろう?」

「そこで何故あんたが当然なのか気になるけど、まあいいわ。確かに私が連れていった子たちだしね。分かったわ」

私は手を挙げて降参のポーズを作る。それを満足そうに見ているトーマ。ふと外野が静かになつてているのに気がついて、周りを見回す。そこにいたのは田をキラキラと輝かせているリアと、興味を失くしたのか、空いてるベッドに横になつているミカゲだった。

「すごいです、トーマさん! 師匠にそこまで言えるなんて! 尊敬です!」

と、目を輝かせているリア君。尊敬するのはそこか!?

「いや4年以上もつきあつてればこうなるつて。師匠に何か言いたいことがあれば遠慮なく俺に言え。俺から師匠に言つてやる」「調子に乗るな、このバカ!」

私に頭をはたかれるトーマ。これは当然の結果だと思つ。

「痛え! 痛えよ、師匠!」
「冗談とか抜きで。本氣で痛いです!」

「当然だ。6割くらいの力で殴つたからな。これ以上力いれると骨にひびが入ると思つが、試してみるか?」

「遠慮します!」

私たちがぎやこぎやい騒いでいると、部屋の隅のベッドからだるそうな声が聞こえてきた。

「煩い。静かにしてください。他のお客様にも迷惑です」

「なんだよお、ミカゲ。久しづりなのにつれないじゃないか。お前もこっち来て混ざれよ」

「何で僕がトーマさんたちと騒がなきゃいけないんですか。迷惑です」

「何だよ。昔はもっと可愛げがあったのにな。おーい、リア、俺と遊ぼーぜ」

「嫌です。トーマさんの遊びって、稽古じやないですか。トーマさんの相手は嫌です」

みんなに振られて一人し�ょげて立るトーマ君。不覚にも笑ってしまった。

「何なら私が遊んでやるつか？ 久々に」

「え、師匠と……？」

「何よ、その顔。嫌なら別にいいわよ。帰つてからたつぱりと遊んであげるから」

「それも嫌！！」

何やら一人真剣に考え込んで立るトーマ。今しごかれるのも帰つてからしごかれるのも嫌だな……とか何とかブツブツ言つているが、無視。

「ま、今日はもうだいぶ疲れたしな。明日遊んでやる。お前に相手させてやりたい奴もいるしね……」

そこで私は部屋を見渡した。そこでふとあることに気がつく。

「リア、ミカゲ。ファイアとファイアは？」

「2人は今隣の部屋です。貴女が帰つてくる前に眠つてしまつたので。貴女が帰つたら起こしてほしいと言つてましたよ。一応2人をバラバラの部屋に寝かせるのはどうかと思ったので、一緒に寝せておきました」

ミカゲがそこまで言つたところで、部屋のドアが開く。そこからちょこんと顔を覗かせたのは、私がちょうど探していた顔。

「あ、セーラさんだ！」

「だ！」

そう言つなり、2人は私の元に駆け寄つてきた。その様子の何とも可愛らしいこと。傍にいたリアに田をやると、逸らされた。あんたに期待はするなということか。

「こいつが私の1番弟子、トーマよ。こつちは見れば分かると思つけど、狼族の双子、姉のフィアと弟のフィイよ

「よろしくな

「よろしくお願ひしますー」

「すー」

3人は和やかに握手を交わす。互いに手を離したところで私はまた口を開く。

「あんたに稽古の相手をさせたいのはこの子たち。どう、見た目では？」

「どうつて……。この子たち、稽古できるのか？ 師匠が俺に相手させたいと言つからには相当な腕なんだろ？ けど」

「この子たち、こう見えてもリアと同じ年よ。腕もリアと同じかそれ以上。リア、あんたもうかうかしてると抜かれるわよ

「そこで僕に話が飛ぶんですか！？」

「ひつして、私の帰還は和やかに歓迎されたのだった。

いじる（前書き）

相変わらず、リア君はいじられています。いじる人は増える一方です。

愛ゆえにみんないじってるんです。

翌朝、早速私たちはトーマも加えて早朝稽古にいそしんでいた。ちなみに今日の組み合わせは、私とフィア、トーマとフィイ、ミカゲとリアだ。

「そ。そこそこ。んでもって身体回したりこっちから

「はい！」

流石、といつべきか、基本的どころか応用編までかなり出来上がっているフィイ相手に、細かい指摘をしながらも全て受け流すかかわしているトーマ。もちろん、わざと受けているのはフィイが体勢を崩さないようにするためだ。自分のダメージが最小限になるようにつまく受け流している。流石、私の1番弟子ね。

「そこで、膝を伸ばさない！」

「はう！」

とか言つ私も指摘しつつ、かわしたり受け流したり。ついでに余所見までしている。流石は師匠？

「リア、いい加減僕に一発でも当ててください」

「う、じゃあ動かないでくださいよ～！」

情けない声が聞こえてきたと思つたら、リアだつた。リアはかなりの速さで身体を動かしているのだが、なにせ相手はミカゲだ。未だに攻撃の一つも当たられないでいる。空振りしてもたいして体勢を崩さないのは流石といつべきか？

「ふわああ

とうとうミカゲが欠伸しだした。両手を頭の後ろで組んでいかにもつまらなそうだ。しかし全て攻撃はかわしている。そんなミカゲを前に、リアはもう涙目になっていた。

「リア！ あんた師範代でしょ！ ミカゲに一発くらい当たられなくてどうすんの。ミカゲが稽古で欠伸するなんて、そつそつないわよ…」

「そんな、師匠、僕だつて頑張ってるんですつて！」

「トーマさん、相手交換しませんか？ 僕がフイイの相手しまわよ」

「ミカゲさん！？」

「おお、いいぞ。リアの相手なんて久しぶりだな！」

「トーマさんまで！？」

リアのプライドは粉々に打ち砕かれたようだが、そんなの気にする2人ではない。諦めろ、リア。

「さて、久々だからなあ。たつぱりしげ」にてやる」

「トーマさんのじきは半端ないんですからね！ もう、直覚してますー！」

「歸因地制宜に比べたらマシだわ？ わたし、もうかりでもいいぞ」

「あら、私と比べたらマシ、とばかりにひとかしら？ ねえ、リア？」

「モー、僕に聞くんですか！？」

そりそり本氣で泣きだしそうになつてきただので、いじるのほっこまでにしどけ。あ、苛めてるんじゃなこよ。愛ゆえにこじつてこるの。

2分後。

「ほら、リア！ 早く俺に這いつみろよー！」

「結局相手が変わつても一緒にやないですかーー といふかレベル上がつてますからーー！」

やつぱりトーマに全てかわされていた。つこでに這いつみ、トーマは頭の後ろで腕を組み、時折ミカゲが相手をしていくフイイにアドバイスをしている。当然、リアのほうは見ていない。

「あんた器用ね……」

「感心するどー、そこですか！？」

「私なら這つてもかわせるわよ、あんたぐらー」

「僕もう泣いていいですね！？」

宿の朝食の時間が迫ってきたので、稽古のお開きを宣言すると、年下3人組はその場にへたり込んだ。もちろん、私たち年上組は息ひとつ乱してはいない。

「お疲れ様。朝食の前に身体も拭いておきなさい。ちゃんと着替えるするのよ」

「はーい」「はーい」

双子は私の言葉にそろつていいお返事を返してくれた。リアはといつと、小さく手を挙げて、質問、といった。

「何で師匠たちは僕の攻撃を全て樂々とかわせるんですか？」

「そんなの自分で考えなさい」

私の即答にリアがあからさまにがっかりした顔をする。そもそも私がそう簡単に教えると思ったか。しかし、先輩2人はいくらなんでも可哀想だと思ったのか、丁寧に答えてやることにしたようだ。

「お前は、気配が強すぎんだよ」

「気配、ですか？」

「そうです。リアは気配を殺す、とこうよくなじましてないでしょ？　気配というのは、そうですね……」

ミカゲは急に言葉を切ったかと思えば、いきなり私に回し蹴りをしてきた。私は少々驚きながらも難なくかわす。

「あら、はずしましたか。まあ、貴女ならかわすと思いましたけど。リアは今、僕が攻撃しようとしたことは感じ取れましたか？」

「……全く」

「このように、相手に攻撃するという意思、動きを悟られないうちにすることを気配を絶つ、殺す、といいます」

「なるほど」

「で、お前はこれから攻撃します、ってこの気配がだだもれなんだ

よ。」れじや、これからここに攻撃するのでかわしていくださー、つて言つてゐると同じだぞ」

「やうだつたんですか……」

自分の弱点が分かつて満足したのか、リアは気配を絶つ、気配を絶つ、と繰り返しブツブツとつぶやきながら、宿に入つていった。あ、いいこと思いついた。

私は自分の気配を絶つと、リアの後をそつと追つた。私が何をしようとしているのか気がついたのか、トーマとミカゲが呆れたような視線をよこすが、無視。

リアに追いつくと、気配を絶つたままリアの肩を叩く。

「気配を絶つつていつのは、こつするのよ」

「ふぎやうー..」

相当驚いたのか、リアが変な声を上げた。その驚いた顔と声を聞けたから私は満足。いやー、面白かった

「師匠！ ヒドイじゃないですか！！」

「私は気配の絶ち方を教えただけ。どう、分かつた？」

「分かるわけないじやないですか！..」

「あなたもまだまだねえ」

「師匠なんか、大つ嫌いだーー..」

あ、どうとうリアが泣きながら走つて逃げちゃつた。いじつすきたか？『飯、大盛りにしてやるか。

白いご飯が山盛りのお茶碗を前に、リアはまだご機嫌斜めだった。

「だからー、リア、ごめんつて。いい加減機嫌直してよ」

「……悪いのは師匠たちじゃないですか」

「だからごめん、つてさつきから謝つてるじゃない」

稽古を終え、宿の食堂に集合して早30分。稽古中にからかわれたことを未だに根に持つてゐるらしい。

「なー？ リア、機嫌悪いー？」

「いー？」

「ほら、ファイアとファイイまで心配してるじゃない。いい加減機嫌直しなさい、先輩」

「……同じ年だし」

あ、敬語が抜けた。こりや相当拗ねてるな。いつたいどうしたものか。

私が頭を悩ませてると、隣に座っていたミカゲが急に立ちあがつた。何事かと思い、その姿を追つと、ミカゲはリアの後ろで立ち止まつた。あつ、と思つた時にはすでにミカゲの拳骨（結構本気。いい音してた）がリアの頭の上に落とされていた。

「痛つ！ 何するんですか、ミカゲさん！！」

「いい加減にしなさい、リア。周りを見なさい。他の方に迷惑がかつてゐるでしょ。部屋で僕たちの前でならいくら拗ねても構いません。ですが、このようにたくさんの方が集まる場所で、いつもでも拗ねてるのは良くないですよ。さつさと食事をすませなさいあれ、お前も機嫌悪くさせた原因の一人じゃなかつたっけか？ よくもまあぬけぬけど。しかし、その一言でリアがハツと気がつくものがあつたらしく、少しは機嫌直したらしいのでよしとするか。

「みんな仲良しが一番ですー！」

「ですー！」

双子も「ココ」だ。

というわけで、私たち一行の食事が始まった。

「さてと、無事食事も始まつたことだし。トーマ、どうだつた？」
私の一言にリアの誰のせいだ、とでもいづらうな視線が突き刺さつてきたが、華麗にスルーする。リアも諦めたのか、特に何も言ってこなかつた。

「どうつて……。そうだな、まず一番に驚きだな。フイイはホントに初心者なのか？」

「正確には違うけど、……ほぼ初心者よ」

歯切れの悪い私の答えに、トーマが一瞬怪訝そうな顔をするが、すぐに引っ込めて平静を装つた。流石は私の弟子、とでもいづべきが、この辺の空気の読み方はよく心得ている。

ミカゲに目線を送つていたから、後でミカゲがうまく説明するだろひ。

「こじてももつたひないな。フイアちゃんも結構いい動きしてたし。2人が狼族でなければ……」

「トーマさん！」

リアの鋭い声に、トーマが気まずそうな顔をする。

フイアとフイイが狼族でなければ。これは私も何度か思つたことがある。そうすれば私の道場に連れて帰れたのに。

基本的に”ネコ族”は”狼族”を恐れる。私やトーマを始めとする師範代クラスの連中は何とも思わないが、道場の他の子供たちはそうはいかない。特にあの道場にいる子たちの多くは狼族に親を殺されているのだ。親がいないネコ族の子供は、守ってくれる人がいない。だから私が定期的に森を探索しては親のいない子供たちを引き取つて回つているのだ。

「フイアは悪いことしないよ？」

「フイイもー！」

「うーん、そういう問題じやないんだけど、まだ分かんないか？」

そもそも他の狼族がやつしたことなんて、この子たちには無関係だ。

しかし、幼い子たちにはそれが分からない。だからこそ、連れて帰るわけにはいかないのだ。

「そうだ、せっかく来たんだから、トーマに頼み事していい？」

私は少し暗くなりかけた空気を払拭するようにわざと明るい声で言った。

「師匠が頼み事？ 珍しいな。何？」

「ちょっと追つて欲しい人がいるのよ」

「師匠の田じやダメなのか？」

「見失ったの、一昨日だから私の田じやもつ無理だと思ひ。あんた、木とか石から記憶読み取れるでしょ」

「なるほどな。了解。後でその場所に連れてつて」

そこまで約束を取り付けてから、田の前の食事を片付けることに集中する。ふとリアのほうを見ると、あんなに大盛りにしてたのに、もう「」飯の山が消えている。恐るべし、成長期。

食事開始から1時間後、ようやく全員の食事が終わった。主に時間がかかるのは女性陣。はい、私とフィアのせいです。女の子は食事に時間かかるものだからね。

「いじつけまでした」

最後に食堂のおばちゃんに挨拶とお礼を言って部屋に戻る。あのおばちゃんの「」飯、おいしかった。

「で、師匠。この後どうするんだ？」

「さつさと追わないと追いつかないから森に行くわ。みんな、荷物まとめてきて」

あいつらが私の身体を狙っているなら、私が追いつけない速度で移動するわけないが、その辺はまだあいつらには伏せておこう。余計な心配かけたくないし。

みんな手慣れたもので、ものの数分で全員の支度が済んだ。

「あ、ヤバ。私まだ支度してない……」

「自分から言つておいて何だよ！」

少々痛いツツ「」ミが入つたが、自業自得だろう。甘んじて受けさ

せていただきます。

「みんな、忘れ物無いわね？　じゃ、出発！」

宿を出で、森のまづくと一歩踏み出した。私の後ろにいた仲間がい

る。

裏切り（前書き）

彼らを、彼らを嫌わないであげてください。

「北東、だな」

トーマが手を置いていた石から手を離しながら言った。

「北東、ね。間違いなさそうだわ」

2日前、私の目の前であいつらが向かつた方向と一致する。北東に何かがある。そう考えていいいだろう。私は自ら、そこへ向かおうとしている。そう考えただけで身体が震えた。

「大丈夫ですか、師匠」

「ただの武者震いよ。あんたたちも私についてくるつもりなら、覚悟しておきなさい」

「今度は置いていくとか言わないんですね」

「行つても聞かないでしょ……」

答える私の声は少々呆れ氣味だ。そんなところまで似なくていいのに、全員私に似て一度言い出したら何を言つても聞きやしない。自分でも自覚があるから何も言えない。

「ホント、こんな弟子を持って大変なのか……」

「幸せなのか、ですか？」

リアのからかうような言葉に、私は眉をあげて返事する。
「距離的にはたぶん俺たちが普通に走つて1日分くらいだと思つ。どうする？」

「そうね、あいつらがどこに向かおうとしているのかは知らないけど、身を隠しながら追うなら妥当な距離でしょう。歩いていきましょ。それに……」

私はそこで言葉を切つてリアに視線をやる。急に田線を合わせられたリアはキヨトンとしている。

「走るといつてこれなくなる子もいるかも知れないからね」

「な、師匠！ それって僕のことですか！？」

「あら、自覚あるの？ 私、リアの名前なんて一言も出してないけ

ど」

「しつかり僕の目を見て言つたじゃないですか！！」
すつかりリアの機嫌を損ねてしまった。そんな私を呆れた目で見るミカゲ。何も言つてはこないから、もう諦めの境地に入っているのだろう。

「行くなら早く行こうぜ。ほら、双子だけ先に行つちまつてるぞ」

「ここ、ファイアたちの森」

「ファイも案内できるー」

慌てて先を見ると、双子たちが木々をかき分けて森の奥のほうへと向かっているところだった。

「あ、『ラーラ』、勝手に入つたら危ないって！」

「大丈夫。ここ、ファイアたちよく知つてるー」

「るー」

よく知つてる？ とこつことは、やつぱりここが狼族たちの本拠地となる森なのだろうか。

「ほら、ルーラー」

「みちー」

木々をかき分けて双子が指し示す地面には、よく見ると何度も通り抜けて踏みならされた道があつた。

「こんなところに道が……。気づかなかつた」

「師匠でも気がつかなかつたのかよ」

「いえ。違います。ここが出来たのはたぶん、昨日か一昨日ですよ。たぶん、師匠を通らせるためにわざわざ道を作つたんじゃないかと」ミカゲが少し鼻をぴくつかせながら言つた。あ、カワいい。……つて、今私のこと、師匠つて呼んだ？

私が驚きの視線を向けると、ミカゲは少し恥ずかしそうに顔を背けた。

「つてことは、僕たちを誘つてるんですかね。どうします、師匠？」

「誘つてるんなら乗らなくちゃ。行くわよ」

私は先頭に立つと、道に一歩踏み出した。私の後ろにファイア、フ

「イ、リア、ミカゲ、トーマの順で続く。道はかなりしつかりとならされているらしく、とても歩きやすかつた。

「モー、右です」

「すー」

一本道をずっとただびつていいくと、道が急に途切れた。フィアとフィイを振り返つて道を問つと、一人仲良く右を指差した。

「右、ね」

「師匠！！」

あの悲鳴のような声を上げたのはリアだったのか、ミカゲだったのか、それともトーマだったのか。

確認する前に、私の意識は途切れていった。

くそ。油断していた。師匠が狙われていたのは分かつていたはずなのに。目の前で、すぐに手が届きそうなところで、師匠は崩れ落ちた。

「手前ら、そこだけよ」

トーマさんが今までに聞いたことないほど低い声で田の前に立つものを威嚇した。

「できない」

「これ、フィイたちのお仕事」

そう言つた双子の目には光がなかつた。たぶん、かなり強い暗示をかけられているのだろう。それが分かつているのか、トーマさんも威嚇はできても手は出せないでいる。

「フィア、フィイ。ご苦労様。自分たちだけできそう？」

「リュウセイさん……」

僕の口から驚きの言葉がもれる。崩れ落ちた師匠を抱えているのは、数週間ぶりに見る師匠の兄、リュウセイだった。

「ミカゲさん、リュウセイって？」

「師匠のお兄さんです」

双子から目線を外してはいないが、気配でトーマさんとリアが驚いたのが分かった。無理もない。実の兄が直接妹を襲いに来るなんて、思いもしなかつただろ？

「ミカゲか。久しぶりだな。悪いけど、カラムはもらっていくよ。俺たちにも必要なんでな」

「師匠を、どうするつもりですか？」

「神殿」

リュウセイが面倒臭そうにぽつりと言った。

「この森の北東に神殿がある。知りたければそこに来い」

それだけ言って、リュウセイは師匠を抱え直すと、森の奥へと消えていった。

「一つだけ言いたけど、その子たち、天才だから」

僕たちの視界から完全に消え去る直前、リュウセイがそう言った。あいつの言う”その子たち”が誰を指すかだなんて、火を見るより明らかだった。

「フィア、お前たちをここから先へは行かせない」

「フィイ、お前たちを倒す」

「マジかよ……」

双子の腕前はトーマさんも実際に見ている。本気の二人を自分も相手も怪我をさせずに戦闘不能にするのはほぼ無理であろう。

「本気、ですか」

「本気」

「仕方ないです」

静かに構えた僕をちらりと見て、トーマさんは少し驚いた顔をした。

「ミカゲ、本気か」

「手加減できる相手、じゃありませんから」

「しゃあないか。お前ら、恨むなよ」

「一人とも、本気なんですか！？」

「リア」

僕はリアにやるべし」と田線のみで促す。リアはハッとした表情になつて、小さく頷くと、構えた。

「早く、師匠を追いましょう」

僕のその一言で、両者ほぼ同時に動き出した。

裏切り（後書き）

最初からこうするために、2人は彼女たちに近づいた。
約束を守る。ただそれだけのために。

追跡（前書き）

いよいよクライマックスに近づいてきました。
これから一気にラストまであげていきたいと思います。

「ミカゲ、結構やばいぞ」

「分かつてます。もう少し、もう少しだけなんとかなりませんか」

「馬鹿。誰に物を言つてやがる」

実際、トーマさんの戦い方を見ていて、かなり本気を出しているのが分かつた。それこそ稽古のときの比ではない。下手に手を抜くとどちらかが大怪我をするからだ。

ちらりとリアのほうをうかがうと、時折耳がピクリと動いている。どうやら苦戦しているようだ。

「フィイ、平氣？」

「平氣。姉さんは？」

「平氣。リュウセイさんの約束、ちゃんと守るわ」

「うん」

感情の光が一切消えた2人の瞳。人間は人を傷つけるとき、感情があれば一瞬躊躇するものだ。しかし今の2人にはその抑えが無い。躊躇なく人を傷つけようとするものを相手に自分も相手も傷つけないようにするのは至難の業なのだ。

「ミカゲ、フィイの体勢、崩せそうか？」

「たぶん無理だと思いますが、やつてみます」

僕はそう言つて右足を地面に滑らせるようにして一歩踏み出す。そのまま地面を強く蹴り、一気に5mほどの距離を縮める。

地面すれすれの高さを滑るようにして飛び出した僕の身体は、一直線にフィイの元へと行く。一瞬絡み合つ視線。その何も映さない虚ろな瞳に、ゾクリと背筋を冷たいものが通る。

フィイとぶつかる直前、身体をわずかにひねつて背後へと回り込む。低い姿勢はそのまま、足払いをかける。

「フィイ」

僕の足がフィイに届く直前、その間にフィアが割り込む。そして

タイミングを合わせて僕の足を上にはじいた。その勢いに乗せて宙返りし、さがる。

トーマさんの脇までさがる頃にはもう、フィアは元の位置に戻っていた。リュウセイが師匠を連れて消えていった道の前。

「やっぱり難しいか。先に誰かを行かせるわけにはいかないし」

「元を絶つしか……」

「いた……」

視線は双子から逸らさないまま、リアは静かに咳く。足がわずかに動いて示したのは双子の右斜め後ろ。トーマさんの正面。

「ミカゲ、リア。30秒」

それだけ言って、トーマさんは地面をけつた。とほぼ同時に動き出す僕とリア。僕とリアが向かったのはトーマさんと双子の間。僕はフィイと、リアはフィアと向かっている。

トーマさんはそのまま木々に間に突っ込んでいった。

それまで何も感情を映さなかつたその目に僅かに動搖が見えて、僕は自分の予想が正しかつたことを確信した。

「フィイ！」

フィアがそう叫ぶと同時に、フィイが駆けだす。その前に回り込む僕に、フィアが突っ込んでくる。と同時にリアが回りこんできてフィアの進路を塞ぐ。

「姉さん……」

フィイが地面を蹴りうとしたのを見て僕が構えた途端、急に糸が切れたかのようにフィイの上体が傾く。慌ててフィイを受け止めると、ほぼ同時にフィアも倒れ込んだらしい。リアも慌てて受け止めていた。

「殺してないですよね？」

「当たり前だ」

そう言いながら戻ってきたトーマの類は、軽く切れていた。僕は眉をひそめながら問う。

「短刀、ですか」

「ああ。しかも、お前の一族のもんだろ、これ

トーマが投げてよこした短刀は、確かに僕たち、"黒ネコ族"が7歳の儀式のときに授かるものだつた。傷口に見覚えがあつたので、まさかとは思つたが、どうやら本当だつたらし。

「お前らのとこ、危ねえかもな」

「あれでも、"黒ネコ族"は武闘派の一族です。籠城でも何でもして自分たちで何とかしますよ」

「それよりも師匠、つてか」

「茶化している暇はないでしょ。さつと追いますよ」

「へいへい」

トーマさんが木々に手を置き集中しだすのを確認して、僕はリアと相談を始める。

「フィアとフライ、どうしましょか」

「ここに置いていくわけにもいかないですね。僕もこの子たちに背後襲われるのは嫌です」

「かといって連れて行つて目覚めたときに暗示が解けていなかつた

……」

「いや、その心配はないだろ」

話に割り込んできたのは、いつの間にか集中を解いていたトーマさんだつた。

「暗示かけている側の記憶を飛ばしてきた。かけられる人がいなければ暗示もかからないだろ」

「記憶とばしたつて貴方は……。かなり危険な」としますね。一步間違えれば死ぬじゃないですか

「その辺の加減は心配すんな。慣れてる」

「そんなことに慣れないでくださいよ……」

何故そんなことに慣れるような生活をしていたのかは恐ろしいので聞かないことにする。一步間違えれば自分も同じ生活を送ることになつていたはずだ。

「とにかく急ぎましょう。師匠が心配です」

「リアはホントに師匠が好きだな。さてと、俺はフィアを背負うから、ミカゲ、お前はフィイを背負え。リアはいつも通り、周りの警戒を頼むぞ」

「はい」

トーマさんはフィアを背負うと、駆け足程度の早さで走りだした。そのすぐ後を追うリアとフィイを背負った僕。

「これから気配を完全に消す。リアもできるな？ 絶対に見失うなよ」

言い終わると同時に、トーマさんが消えた。

田の前に姿だけは見えてるが、まるでそれが幻のように感じられる。

自分の気配も消しながら、トーマさんの後をしっかりと追う。あれは幻ではないかと疑い出す気持ちを押さえこんで、ただひたすらトーマさんの姿を追つた。

気配を探つてみると、リアの気配も感じられないから、つまく消すことができたようだ。

（師匠、どうか無事で）

僕はそつと祈りながら、日が暮れ始めた森をひたすら走つていた。

僕たちが師匠と別れた場所から、警戒しながら走ること約1日。目の前に大きな建物が見えてきた。その手前300mくらい位置で立ち止まる。双子はまだ眠つたままだった。

「あれで、間違いないよな」

「あたりに狼の気配はありませんが、たぶんそうでしょう。入りますか」

「待つて下さい。中から誰か出てくる音がします」

リアの警戒の声に、僕たちは息をひそめて入口をうかがう。中から黒い長身の男が出てきた。

「リュウセイさん……。間違いなさそうです。行きましょう」

「行くつて、隠れなくてもいいのかよ」

「リュウセイさんが出でてきた時点で、ここに僕たちがいることはすでにバレています。隠れても意味無いですよ」

僕は何のためらいもなくフィイイを背負つたまま神殿の方へ向つて歩き出す。後ろを恐る恐るついてくる、フィアを背負つたトーマさんとリア。

「意外と早かつたな。もう少しかかると思つてたぞ」

「生憎、僕たちはそれほど甘く鍛えられていませんから」

「カラランの訓練の賜物か」

おかしそうにリュウセイさんが笑う。途端にムツとする僕たち3人。

「悪い。別にお前らを笑つた訳じゃない。しかし、お前らもほんとにカラランのことが好きだよな」

「セーラです。いい加減、覚えたらどうですか」

「俺の中でカラランはいつまでもカラランだ。それよりも、フィア、フィア。いい加減起きろ」

リュウセイさんの言葉に固まる僕ら。恐る恐る後ろに背負つてい

る双子の様子を窺う。

「フィア、ちゃんとできましたー？」

「たー？」

「気がつけばそこにはもう双子の姿はなく、慌てて振り返るとすでにリュウセイさんの隣にいた。

「上出来。さて、最後のひと仕事といきますか

「師匠は中だな？」

「さあ。入つてみたらどうだ？　まあ、そう簡単に通しはしないがリュウセイさんの返事を聞いて戦闘態勢に入るトーマさんとリア。僕も静かに構えを取る。対するリュウセイさんはその場に立ち尽くしてまま、一向に構えようとしない。

「さつひと構えろよ」

「わざわざ待つてたのか？　見かけにみりらず、律儀なやつだな。いいぜ。どつからでもかかつてこいや」

「そうですか。では遠慮なく」

僕は身内であろうと容赦はしない。未だためらっているトーマさんとリアを置いて駆け出す。正直リュウセイさんはそんな余裕を持っている相手ではない。構えないというなら好都合だ。

「ミカゲもまだまだ甘いな

体同士が接触する直前、リュウセイさんがそつ跋くのが聞こえた。嫌な予感がし、方向転換しようとしたときにはもう遅かった。

「おやすみ

「え……」

「…………ッ！」

首筋にチクリと痛みが走ったかと思えば、急に全身から力が抜けた。崩れ落ちる身体を抑えることができなかつた。

「ミカゲ！？」

「…………ッ！」

渾身の力を振りしぶって身体を捻る。直後それまで僕がいたところにリュウセイさんの足が突き刺さる。地面が抉れるのを見て、背中に冷たいものがはしつた。

「よく頑張ったな。それに敬意を表して追撃はしないでおこしてやる」「くつ」

地面から身体を起こすこともできないう僕を見て固まるトーマさんとリア。僕自身も驚いている。今までどんな攻撃を、たとえ師匠でも、受けても行動不能になることはなかつた。

「ああ、なぜ動けなくなつたか？ そんなの簡単だよ。これ。俺のお気に入り」

そう言ってリュウセイさんが取り出したのは長さ一〇〇ミリほどの長い針だった。その先端は何か液体が塗られていた。

「ただの麻痺毒だ。死にはしない。安心しろ」

そしてそのまま特に構えもしないまま、地面を蹴つた。そんなに強く蹴つたようには見えなかつたのに、その速さに虚をつかれて一瞬トーマさんとリアの反応が遅れた。

「やつぱりダメ！」

「ダメなの！」

リュウセイさんの毒針がトーマさんとリアに触れる直前、そこには小さな2つの影が飛び込んだ。とたんに崩れ落ちる2つの影。

「フィア！？ フィイ！？」

とつさに身体を受け止めるトーマさんとリア。それを感情のない目で見つめるリュウセイさん。

「フィア、今度はセーラーさん守つたいたい。もうトーマたちと戦いたくない」

「フィイも、フィイもセーラーさん守る」

「……暗示が切れたか。まあ、いい。これでお前らも用無しだ」リュウセイさんがぼそりとそう呟いた。誰よりも早く反応したのは、誰よりも耳がいいリアだった。

「いらないってなんですか！？ この子たちは、貴方のために頑張つてたんじゃないですか！」

「止める、リア……」

僕の制止も聞かずリアが飛び出した。慌てて引き留めようと飛

び出すトーマさん。しかしそれもリュウセイさんの思惑通りだつた。

「カラソが鍛えたというから楽しみにしていたのに。がつかりだな」

「リュウセイ、終わつたのですか？」

女性の声が聞こえて神殿の入口を仰ぐ。そこから出てきた人に、地面に伏した僕たち5人は驚愕のあまり声も出せなかつた。

「師匠……？」

呆然とつぶやクリアの声が聞こえた。

愛（前書き）

家族の愛は、何物にも負けないと思つんですね。

「お疲れ様です」

「うふふ、この子意外と意志の力が強くて飲み込むのに時間がかかりました。力が欲しい……」

そう言って師匠、中の誰かは僕らをじっと見つめた。

「皆さんいい力を持つているのですね。あたし、あの双子が喰いたいです」

その言葉に双子が緊張する。しかしそうにその緊張は解かれた。「ダメです。仮にも同じ種族でしょう。貴女が守るべき対象を喰つてどうするんですか。喰つなら俺にしてください。あいつらより力も多いでしょ」

リュウセイさんが僕たちと師匠の間に立ちはだかるよう立つ。「あたし、リュウセイはよく頑張ってくれたからずっと傍に置いておいてあげようと思つていたのですが

「すぐに力が欲しいんでしょう。なら俺を喰つたほうがいい

「あら、おかしな子ですね。自分から命を差し出すなんて。まあ、いいわ。そこまで言うのならリュウセイを喰わせてもらいます」

そう言つと、師匠がリュウセイさんに目配せした。頷くりゅうセイさん。リュウセイさんは茂みに向かって手を振ると、茂みから何人の狼が出てきた。正直、これほどの数がいたのに気付かなかつたなんて思うと寒気がした。

「神殿の中にこいつらを運んでくれ」

そう言つてリュウセイさんが一番近くにいた僕を抱えあげた。

リュウセイさんが僕を神殿の床に下ろす直前、僕はこつそり尋ねてみた。

「師匠の中に入っているのは

「ルーパス」

そう短く答えた。耳のいいリアならもうちらん聞こえていただろう

し、この神殿の床は大理石だ。トーマさんはさりげなく床に意識を集中させていた。すぐに聞きだすだろ？。

”ルーパス”。それが師匠の中に入っている奴。確か神狼と呼ばれる存在だったはずだ。昔師匠の家の書斎に置いてある本の中にそんなことが書かれていたような気がする。

ルーパスは一人、神殿の正面中央奥に位置する階段の前に立ち、僕らを一瞥すると口を開いた。

「皆さん揃いましたね。それではこれから皆さんには本当のあたしの復活のときを見せてあげますね」

そう言って懐からひと振りの短剣を取り出した。それを僕たちに見せつけるようにして構える。

「これ、何だか分かりますか？」

「それは師匠の……」

「よく分かりましたね。そう。族長一家を刺し、命を奪つた短剣。それだけでかなりの力を持つています」

そしてルーパスは手に短剣を構えたままリュウセイさんを手招いた。素直に近づくリュウセイさん。

「リュウセイ、今まで10年間本当にありがとうございました。さようなら」

そのままなんの躊躇いもなく、短剣をリュウセイさんの左胸に突き刺した。

「……ダメ。いや、嫌よこんなの……。……？」

目の色は何も変わらないまま、ルーパスからそんな言葉が漏れてきた。

「何、まだ意識が残つていたんですね。いい加減 服従したらどうですか」

「いや。私の短剣でまた家族を刺すなんて、嫌だ」

それは不思議な光景だった。同じ口から二つの声が聞こえてくる。まったく同じ声なのに、全く違く声。

「私の中から出ていけ！！」

「！？」

一瞬師匠の身体が眩しく光り輝いた。あまりの眩しさに思わず目を瞑ってしまう。再び目を開いた時には、そこにはいつも通りの表情の師匠と、それまでそこにはいなかつた見たこともない女人人が立つていた。

びっくりした。背後から不意をつかれて氣を失い、氣がつけば自分が最も憎む身内が胸から血を流している。その胸から突き出していたのは、私が誰よりもよく見知つたもの。

「また、私がやつたの？ 父様と母様のときのようだ？ ねえ、兄様、答えてよ……」

田の前にいる唯一残された肉親、リュウセイの姿しか見えなかつた。

「カラーン……？ 良かつた、元に戻つたのか……」

胸の短剣をそつと引き抜く。それを傍らに置いて、私は出来るだけ優しく、実の兄を抱きしめた。頬からひとしづく、涙がこぼれおちた。

「お前だけは……、無事……よかつた」

「嫌……嫌だ！！」

兄様がまるで最後の力を振り絞るように、優しく笑つた。10年ぶりに見る兄様の優しい笑顔。何でこんなとき今まで笑おうとするのよ。

「お前だけは、お前だけは絶対に許さない……！」

私の両目からは後から後から涙が溢れだしてくる。それを拭おうともせず、私はルーパスを睨みつけた。そつと兄様を床に横たえると、その懷からひと振りの短刀を抜きだす。兄様のだ。

「あたしを追い出すなんて……。面白いわ。ますます気に入りまし。こうなつたら少々力ずくでもその身体、いただきますね」

「あんたなんかに渡すもんか。200年前、私の祖先がしたように、あんたを封じ込める」

「何の知識も無いのにどうやって、ですか？」

ルーパスが可笑しそうに笑う。私もできるだけ不敵に笑つて宣言した。

「簡単よ。あんたを倒せばいい」

「何、あたしを倒す、ですか？ カランさんはとても面白いことを言うのですね」

今度は腹を抱えるようにして大笑いしだす。しかし、私の目が本気なのを見て笑いをひっこめた。

「本気、みたいですね。いいわ。相手してあげましょう」

静かにルーパスが構えた。私も兄様の短剣を構える。一気に空気が張り詰める。

私は息を詰めると、心の中で3秒数えた。数え終わると同時に床を蹴る。ルーパスもほぼ同時に地面を蹴つた。

ルーパスと身体が交差する瞬間、私は目を閉じた。絶対に、負けない。

愛（後書き）

師匠、復活。次回活躍します。

最終決戦（前書き）

師匠 vs ルーパス

これで全てが終わるんですね。

最終決戦

田を瞑つて自分を中心とした全方位に神経を集中させる。

「師匠、田……」

一瞬私が目を開けた時にちらりと見えたのか、トーマが微かに声を上げた。普段の私は黒髪に碧の目をしている。が、今は……

「金、色？」

私の能力完全開放。それがこの能力”千里眼”だ。視力を全て失う代わりに、全方位の視覚情報を全て知覚する。光を失った私の目は碧から金色に変わる。それゆえに、私は背後から襲われることもなく、不意を突いて攻撃することも可能だ。

「師匠、すごいです。こんな師匠、初めてみました……」

これが私の本当の力。リアを始め、その場にいるルーパス以外が全員驚いている。私はルーパスの動きをとらえながらも、しつかりその様子を観ていた。

「これが貴女の本当の能力なのですね。ますます気に入りました」「よくもそんな余裕が持てるわね。一応私がこの力を解放して負けたことはないんだけど?」

ルーパスが鼻で笑う。弟子たちとは違い、全く動じない様子に苛つきを通り越して感嘆すら覚える。

「どうしたのですか。あたしのことはしつかり見えているのでしょうか? ちゃんと当ててください」

「言われなくてもッ！」

私の渾身の回し蹴りを受けて僅かにルーパスの身体が後ろに押される。

「よくもまあ、私の渾身の一撃を受けてその程度で済むわね。驚きを通り越して呆れるわ」

「良くも悪くも靈体ですからね。さあ、どんどん行きますね」

そういうなりルーパスが床を蹴る。一瞬速さで見失いかけるが、

全方位を知覚する私には関係ない。普通の人だつたら背後に回り込まれて完全に見失うだろうけどね。

身を屈めてルーパスの上段回し蹴りを回避し、その勢いのまま足払いをかける。ルーパスはバツクステップでかわした。

「全方位知覚、ですか。面倒臭い能力を持つていますね。さて、どうしましようか」

口調は困っているようにみえても顔が笑っている。その冷たい笑顔に私の背筋に冷たいものが走る。無言で気を引き締める。

「そうです。あたし相手に油断しないのはとてもいいことですよ。

そのままあたしを喜ばせ続けてください」

「私はあんたの機嫌取りのために戦つてるわけじゃないんだけど」「結果は同じですよ。さあ、続けましょう」

狂っている。私は素直にそう感じた。私が素早く動けば動くほど、強攻撃を当てれば当てるほど、ルーパスの笑みは深まっていった。まさに戦いに狂った者。

焦つてはならない。自分にそう言い聞かせながら、冷静に相手の動きを観察する。私の渾身の一撃を与え続けても顔色一つどころか眉毛の一本も動かさないような相手だ。焦つた瞬間、飲み込まれる。しかし私も生身のネコな訳で。

「さすがに疲れてきましたか？ 生身の身体も大変ですね」「うるさい！」

口ではそうは言つてみたものの、自分の体力の限界は自分が一番よく理解している。全方位が知覚出来ても私の反応が遅れれば意味がない。この能力は私の基礎能力の高さと合わせて初めてその威力を発揮するのだ。

「もう少し楽しみたかったけれど……。そろそろ終わりにしましょうか」

途端にルーパスの纏う空気が変わる。滅多に気圧されたことが無い私が、そのあまりにも大きい存在感に気圧された。

「……何のつもりですか」

ルーパスが低くそう言つた。よく見るとルーパスの身体は完全に静止していた。そしてルーパスの身体から流れてくるこの懐かしい気配……。

「兄、様……？」

私がそう呟くと、ルーパスが口を開いた。反射的に身体を固くしてしまった。

「カラーン……、ルーパスの、本体……上

「兄様……、兄様なの？」

「そんなに長くは止められない……。早く」

そう言つたルーパスの目には早くも元の光が戻り始めた。兄様の頑張りを無駄にしてはならない。私はルーパスの脇を通り抜け、正面の階段を駆け上がり始めた。

「何段あるのよ、これ！」

ざつと目測で50m。100段ほどだろうか。正直今の私に100段を速度を落とさずに昇り続けるのはきつい。

それでもなんとか昇りきると、頂上には大きな棺のようなものが置かれていた。短剣を持ち直してゆっくりと近づく。

中を覗くと、そこには獣が横たわっていた。銀色の毛を持ち、狼族と同じ耳を持っている。これがあの伝説の神狼の本体なのだろう。

「これで、終わる……」

「止める！　！」

私がルーパスの靈体が階段を昇りきつて背後に現れるのを知覚したのとほぼ同時に、私の手に握られている兄様の短刀が獣の身体に沈んだ。

「ああああああ！！」

……終わった。背後からルーパスの断末魔の叫びが聞こえて私はそう確信した。

「ツ！」

「一人でなど……、死んでたまるかツ！」

トスツという軽い音と共に、何かが背中に突き刺さる感触。意識

を背中に集中させて、その異物を確認する。それは私が一番良く見
知つたもの。

「お前は、私たち一家を殺すのね……」

私の短刀が私の背中から突き出ていた。

最終決戦（後書き）

次回、最終回。

一
痛
あ

「師匠!? 目が覚めたんですね!」

呻き声をあげる私の横で大声を出しているのは誰だ！……つて、リアか。私は一睨みして黙らせる。そこにはまあまあ、と仲裁に入つたのはミカゲだ。

「師匠、リアはす」と貴女の「」とを心配してすうと傍聴して聞いていたんですよ。ホント、一時はどうなるかと思いました」

「私はそんな柔じやないわよ」

「そういう問題じゃありません！ そもそも師匠は仮にも女性なんですよ！？」 もうどこ自分の身体を大事になさってください

「そうだ。ミカゲ、もつと言つてやれ」

「ヤーヤしながら会話に入ってきたのはトーマだ。」ここにも一睨みして黙らせる。

黙んで黒らせる

「いいわよ、別に。私結婚なんてする気無いし。ずっと道場にいるわ

「それは困るなあ。……冗じて」

え
？

背後から聞こえた声に、私は驚いて振り返る。そこに上半身を包帯でぐるぐる巻きにした兄様がいた。

「兄様、無事だつたの？」

「ん、俺が無事で何か困るのか」

「いや、むしろ嬉しい！」

私は思いつきり兄様に抱きついた。兄様が痛みで顔をしかめるのが分かつたが、さらりと無視してそのまま腕に力を込める。

「師匠って、こんなにブラコンでしたっけ」

「いや、そもそも俺は師匠に兄弟がいることすら知らなかつた」

「僕もそうです」

後ろの弟子3人から何やら冷たい呆れるような視線を向けられて
いるような気がするが、うん、まあ、気のせいだろう。

「セーラさん目覚めたー？」

「たー？」

神殿の外からファイアとファイイが中に入ってきた。ファイアの手には
清潔そうな真っ白い包帯やタオル。ファイイの手には籠いっぱいの果
物が入っていた。

「セーラさん無事でよかつたのー」

「これ食べるのー」

満面の笑みで籠を差し出すファイイ。か、可愛い！！

「師匠、ファイアとファイイには感謝しなければなりませんよ。師匠の
怪我も、リュウセイさんの怪我も、包帯とか見つけてきて手当して
てくれたのはこの2人なんですから」

「そうだったの。ありがとう」

「お礼されることじやないよ？」

「ファイイたちはセーラさんに恩返ししたかった

そう言いながら、ファイアは私と兄様の包帯を取り替えてくれた。
兄様の包帯を外した時、左胸に残る傷跡がとても痛々しかった。思
わず目をそらしてしまった。

「兄様。兄様は左胸を刺されてたよね。どうして生きていられたの
？」
「うん？ ああ。実はあの短刀、心臓から少しづれてたんだよ。カ
ランの短刀は最後の最後に、俺たち兄妹を助けてくれたみたいだ。
大事にしろよ」

私は深く頷いた。そつと自分の短刀を腕の中に包み込む。私の両
親の命を奪つた短刀だけど、私たち兄妹の命を守ってくれた。それ
だけで、私はこの短刀を大切に思うことができるような気がする。
「セーラさん！ これ、どうぞ」
「ありがとう、ファイイ。これは？」

「それはこの森で採れる果物、リンゴだよ。食べると元気が出るの！」

フィイが満面の笑みで差し出した赤い球体のものは、いい匂いを漂わせていて、見るからにとてもおいしそうだった。

「……ん、おいしい！」

「でしょ？ 僕のオススメなの！」

甘いけれどさっぱりとした味のリンゴは、久々に能力を完全開放した後の氣だるい身体に心地よかつた。

「ところでフィア、この包帯とかどこから持つてきたの？」

「ここに近くに狼族のリュウセイさんが作った狼族の待機所のようなどころがあるんです」

「そこには衣類とか保存用食糧とか、救急セットとかが置いてあるんです」

「泣きながら2人が飛び出していつたときはどうなる事がと思ったが、この2人のおかげで師匠たちを手当てすることもできたしな」「ホント、フィアとフィイは師匠の命の恩人ですよ」

「そうだ。こんな機会滅多にないから何か師匠にお願いしてみるよ」「ちょっと、あんたたち、何勝手なこと言つて……」

「セーラさん、フィアたちのお願い聞いてくれるのー？」

「のー？」

……だから田をキラキラ輝かせて上田遣いに物を頼むのは反則だらう……！

明らかに怯んでいる私を見て、トーマ以下弟子3名、兄様の4人は大笑いしだした。特に兄様なんて笑いが傷に響いているのか、目に涙をにじませている。なら笑わなければいいだろう！！

「……分かったわよ。その代り、私が叶えられる程度にしてよ」

「いいんですか！？」

「やつたー！」

無邪気にはしゃいで喜んでいる2人を見ると、機嫌が悪くともつい頬が緩んでしまう。つい何でも願いを叶えてやりたくなってしま

う。そうなつたら弟子3人を使えばいいか。

「あのね、フイアたちを」

「セーラさんのところに置いてほしいの」

「それは……」

私は考え込んでしまう。正直言つてこの双子なら性格的にネコに混じつても問題ないはずだ。しかし問題は私の道場のほうだ。狼に本能的嫌悪感を持つている子たちが多い。下手に連れて帰れば互いに精神をすり減らして嫌な思いをするのがおちだろう。

「カラソ、俺からも頼む。こいつらも親がいなんだ。お前のところなら安心して預けられる」

「兄様は預かれないの？」

「俺はお前のところに行くつもりだが？」

「ふざけんな……」

いきなり大声を上げ始めた私に双子がびくりと身を竦ませる。私は慌てて笑顔を作つて双子に向けた。

「何を根拠にそんなこと言えるのよ」

「師匠はこの数年間で子供たちを鍛えただろう？ その時俺たちは師匠からいろんなことを教わったんだ」

「そうですよ。現に僕たち、フイアにもフイイにも普通に接しているでしよう」

「偏見をなくすこと。これが師匠から一番初めに教わったことです」

「あんたたち……」

目にジワリと涙が浮かぶ。

「偏見なんてあつたら僕たちの能力が普通のネコに受け入れられるわけないじゃないですか」

「そうだったわね。……分かった。フイアとフイイはつむに連れて

帰る！」

「ホントですか！？」

「ありがとうございます！」

フィアとフイイが嬉しそうに同時に頭を下げた。それを微笑ましげに見つめる外野5人。

「そうと決まればさつさと帰るわよ。こんなところいつまでも居たくないし。兄様も大丈夫？」

「ああ。これくらい問題ない。普通に歩くぐらいなら助けなしでもいける」

「じゃ、帰るわよ。兄様も仕方ないから北の森に帰るまではうちここで置いてあげる」

私が悪戯げな笑顔を向けると、兄様は少し照れたように苦笑した。右手にはフィア、左手にはフイイの手を握り、後ろにトーマ、ミカゲ、リアを連れ、そのさらに後ろに兄様を連れて私は神殿を出た。外はもう夕焼け色に染まっていて、あまりの美しさと眩しそうに、私は碧色の目を細めた。

「さて、帰りくらはのんびり行きましょうか」

日が沈みかけた道を仲間とともに、いつもの場所へと歩き出した。

帰る場所（後書き）

これにて、『氣ままに』の第1部は完結です。
ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

感想、リクエスト等がありましたらお気軽にどうぞ。
第2部にいく前にトーマ君と兄様の短編をアップしたいと思います。
引き続き、師匠たちをよろしくお願ひします。

願わくば、この物語があなたにとって楽しいものでありますように。

美織

トーマが師匠たちに追いつくまでの話です。やつぱり師匠はみんなから愛されています。

俺は今森の中の一本道をただひたすら走っていた。足を止めている暇なんかない。ただただ、焦る気持ちだけが今の俺を支配していた。

もつと速く。もつともつともつと。道を塞ぐものは必要最低限の奴らだけ吐きのめして、足を動かす速度はただの一度も落とさない。とつこの昔に息は上がりきっていたが、そんなことは気にしてられない。目の前が霞んできても、気にしてられない。

ただただ前へ。そのことだけが頭の中にあった。

きつかけは2日前

「師匠遅いなー。いつになつたらまた旅に出れんだろーー！」

俺が道場に戻つて昼寝をしている間に師匠が戻つてきらしい。そしてそのまま行つてしまい、会えず、気がつけばリアまでが俺に子供たちの世話を頼むと、慌ててこゝを飛び出していく。いつたい何なんだ。

まあ、俺自体は子供の相手するの好きだし、生活全般はリアを始め、師匠（順番逆か？）たちがきちんと仕込んでいるから俺が特にしなきゃいけないことはない。むしろ俺が世話になつてゐるくらいだ。

「にしても、今日はいい天気だなー。今日は裏の丘で昼寝でもすつか」

俺がやる気のない間延びした声で言つと、その近くにいた何人の子供たちが反応して、一緒にお昼寝することになった。俺が来てから特に事件らしこともなく、平穀な日々を送つてゐる。

「んー、日差しが気持ちいい。これならぐっすり眠れる」

お昼過ぎといつこともあつて、裏の丘は太陽の日差しが柔らかく降り注ぎ、ぽかぽかとともに気持ちが良かつた。

俺を始め、一緒についてきた子供たちが思い思いの場所で寝転がると、早速あちこちから規則正しい寝息が聞こえてきた。やつぱりいい天気の日にはこうして日に当たつてお昼寝するのが子供だよな。

俺も地面に寝そべつて空を見上げながらぼーっと眠気が訪れるのを待つていた。瞼がトロンと落ちかけた時、俺の耳に微かに声が聞こえた。普段ならそのぐらいの音量で俺が起きるはずもない音量で。しかしその内容が、俺を一発で覚醒させた。

「今、何て言つた？ もう一度、もう一度教えてくれ」

俺はまさかと自分の耳を疑いながら、意識を地面、草、木々に集中させる。

『北の森の“黒ネコ族”が誰かに襲撃されているらしい』

『東の森で“黒ネコ族”的誰かが怪しい動きをしているらしい』

『東の村で“黒ネコ族”的女が危険を冒そうとしているらしい』

『師匠！？』

分かるのは“黒ネコ族”だというのと、女、ということだけだ。でもなんとなくそれは師匠のよくな気がした。というかこの時期に

危険を冒そうとするのは師匠くらいしかいないだろう。

「つたぐ、師匠はまた無茶して……！ これだからほっとけないんだ」

俺がこうしてたまに道場に顔を出す理由。それは師匠のことが心配だからだ。

もちろん、師匠が強いことは知っている。俺はある日拾ってくれた師匠のことを尊敬しているし、そう滅多にやられないことも知っている。

……けど、師匠はどこか脆いところがある。師匠の過去に何があったのか知らない。でもたまに見せるどこか遠く見るような眼差しは、こちらがどきりとするくらい優しく、脆い。

だから俺は心配する。師匠が俺の尊敬する人で、強くて、ヒーローでも。心配でたまらない。

「トーマさん？ 何があったの？」

俺のただ事ではない様子を感じ取ったのか、バラバラに眠っていたはずの子供たちが俺の周りに集まってきた。まだ小さな子も、目をこすりながら、俺の様子をうかがっている。

「んー、なんか師匠がちょっとピーンチらしく」

「師匠が！？ 僕、助けに行く！…」

「私も！…」

僕も、私も、と辺りが騒然とする。僕はそれを嬉しく思いながらも却下した。

「ダメだ。お前らじゃまだ危険すぎる。師匠でもピーンチなんだぞ。お前らが行つたら師匠は心配してもつとピーンチになる」

子供たちにはちょっときついかな、と思いながらも、これは事実だし、こうじうことはきちんと言つておかねばならないと思つてはつきりと言つた。

子供たちは一瞬怯んだように言葉に詰まるが、下を向いて何か考え込んだかと思つと、お互いの顔を見て額を合つた。そして俺のほうを向くと、一斉に口を開いた。

「なら、トーマさんが行つて師匠を助けて！…」

「でも、お前らのことは誰が見るんだよ。俺も一応お前らを守るようになつてゐるんだけど」

「僕たち、自分のことは自分たちでできるし、自分の身くらいは守れるよ。そのために稽古してるし！だからトーマさん、お願ひ！」

「不覚にもむかづくつむかづくつしてしまつた。ホント、いい子に育つたなあ。」

「よし、じゃあちょっとくらへ行つてくるわ。お前らもしつかりな

俺たちは急いで一旦稽古場に戻ると、必要最低限のものを持って、子供たちに見送られながら稽古場を後にした。

俺は稽古場から見えるところまでは急ぎ足だったが、見えないと

じるまでくると同時に走り出した。

一刻も早く、師匠の元へ。

俺は2日前のことを思い出して、思わず頬緩めた。いい子になつたなあ、あいつら。

その瞬間、俺は木に激突しそうになつて慌ててかわす。同時に氣を引き締め直す。こんなところで時間くつてる場合じやねえ。それからしばらく走ると、目的の村が見えてきた。そこで小さく口笛を吹く。この距離からならもうリアに聞こえるだらう。俺だと分かるように微かに抑揚をつける。

間にあつたのだろうか。それとも師匠はもう行つてしまつたのだろうか。

村の入口に、リアが立つていて見えた。ミカゲも一緒だ。

俺はさらに、足の回転を速めた。

- s i d e R y u s e i (前書き)

今回はお兄ちゃんが主役です。

お兄ちゃんの本音、そしてルーパスの真実が少し登場します。

俺の頭の中にはあのカラランが育てたという3人の顔がちらついていた。思わず笑みがこぼれそうになつて慌てて顔を引き締める。

「どうしたのですか？ リュウセイ」

妹の顔をした別人が、何が楽しいのか薄く笑いながら俺のほうを見ている。俺は何でもないというように黙つて見つめ返す。

「あのこの子が育てたという子たちが気になりますか？」

あたりでしょ、とでも言つように笑うルーパスを俺は無視して黙つている。

そのうち一人で笑つているにも飽きたのか、笑いを引っ込める

と、神殿の頂点にある棺に腰掛けて、中にあるものに手を伸ばす。

ルーパスが手を伸ばした先にあるものは、銀色の毛並みの狼族と同様の耳を持つ獣だ。これが神狼の本体らしい。

ルーパスは愛おしげにその本体を撫でると、俺に話しかけてきた。

「リュウセイ、これが本物の狼なんですよ。本来、狼はこのような姿をしていたのです。もちろん、ネコも多少小柄ですが、同じような姿をしていたのですよ。それが長い時を経て、今のような姿になりました」

ルーパスはそこで言葉を切ると、俺に向き直つて俺の反応を探るかのように、俺の目を覗き込む。

「あたしはその進化の過程をずっと見てきました。やがて本来の姿を保つてるのはあたしだけになり、長い時を生きたあたしは力を得ました。けれど、力を得てもあたしは孤独でした。やがて新狼として崇められるようになりましたが、あたしを分かろうとしてくれる仲間はいませんでした。そこであたしは考えたのです」

ゆっくりと立ち上がり、そのまま階段のほうへと歩いていく。

階段の淵に立つたルーパスは、両手を広げると俺のほうへ振りかえつて、笑顔で言つた。

「また元の世界へ戻せばいい。言葉を話さなくとも心が通じ、弱きものを喰つて生き残る世界へ。……ねえ、リュウセイ。そのためにはたしは力を持つたのだと思いませんか」

俺が黙っていると、ルーパスはちょっとつまらなさそうな顔をしたが、すぐにまた元の笑顔に戻つて語り始めた。

「けれど、あたしの1回目の挑戦は敗れました。リュウセイの祖先は、まだ今のような姿になつたばかりで力を持つていました。そしてその族長はその代で最強と呼ばれるほどの力を持つていたのです。後は貴方が本で読んだ通り、あたしは力を封じ込められ、200年

の眠りにつきました。しかし、もう同じ失敗は繰り返しません」狂つてゐる。ルーパスの陶酔したような笑顔を見て俺はそう思つた。それと同時に、彼女に憐みを感じた。もしかしたら、彼女はただ単に寂しかつただけなのかも知れない。

「もし、今回の挑戦が成功したら、ネコ族はどうするつもりなのですか」

俺は静かに問うた。俺が反応したのが嬉しかつたらしく、ルーパスは顔を輝かせると嬉しそうに答えた。

「もちろん、リュウセイにはずっと傍にいてもらおうと思つています。ずっと頑張つてきてくれましたから。そして、この子にも」自分の胸に手を当てて、ルーパスはつこりとほほ笑んだ。

「この子にはしばらく器になつてもらわなければなりませんし。その役目が終わつても、傍にいてもらいます。貴方たち兄妹が傍にいてくれれば、とても楽しいと思うんです」

「俺たちのことじやない。他のネコ族のことです」

「他の……？ そんなの決まつてゐではないですか」

ルーパスは驚いたように目を丸くすると、当然、とでも言つよう

に笑つた。

「全員、殺します」

俺は神殿の外に立っていた。気配でもうすぐあの子たちが到着することが分かつたからだ。

そそくさと外に出る俺を見て、ルーパスはやつぱり、とでもいうような目で見てきたが、俺はそれをきれいに無視して黙つて出てきた。

「なあ、ルーパス。もう終わりにしようぜ。お前の悲しみはよく分かつたから、もう休めよ」

中で休むと言っていたから、直接ルーパスにこの声は聞こえないだろう。しかし俺はどうしても口に出すこと止められなかつた。

10年前、俺が初めて彼女に会った時、一番最初に感じた負の気配は寂しさだった。

なあ、ルーパス。きっとあの子たちが、カラーンたちが止めてくれるから。もう、寂しくなんかなくなるから。だからもう、終わりにしよう。

俺は近づいてくる気配に、思わず頬を緩めた。もう一度、頭の中でシミュレーションする。あいつらが、カラーンたちが傷つくのを最小限に。

「犠牲になるのは、俺だけでいい」

もう一度、気を引き締め直す。これからは一つの失敗も許されない。さもないとあいつらまで傷つてしまいうから。

「今度こそあいつに、カラーンにとって、幸せな世界になりますように」

俺は唯一残った肉親、そして最も愛する妹の幸せを祈った。

埋まれない客（前書き）

新章スタート！！

望まれない客

「くああ。……暇

「せめて平和といつてください、師匠」

ルーパスとの件がひと段落し、稽古場に大人数で帰還した私たち一行は、特にこれといった事件もなく、平穀無事な日々を過ごしていた。

「こう何もない、幸運を通り越して暇だわー。自分で何か起こしてやろうかしら」

「それは止めてください。師匠が本気で事件起こしたらそれは犯罪になります」

ちなみにこの稽古に使っている建物のはずせる戸（一部はずせない戸）を全て取つ払つて大変風通しがよく、戸が当つてぽかぽかと気持ちがいい場所には、私とリアしかいない。

最近暇している私の様子を感じ取つたのか、兄様とトーマ、フィイにファイアは朝早くから森に入つて狩りだか稽古だかをし、ミカゲは行方知れずだ。

さすがに付き合いが長いだけあって、私が暇になると何をしですか分からぬことを知つてゐるらしい。自分で言うのもなんだが。

「師匠、外に誰か人が立つてましたよ」

そう言いながらひょつこりと顔を出したのはミカゲだ。朝から姿が見えないと思つてたら、野菜を取りに言つていたらしい。

稽古場から少し離れたところにミカゲは小さな畠のようなものを作つているらしく、そこで採れたのであるひつ野菜を両手に抱えていた。

「お客さん？ めんどう。リア行つてきて」

「師匠暇してたんぢゃ……。行つてきます」

私の顔を見たリアはそそくさと外に向かつた。最初からそうすればいいのに。

「あー、暇」

そう言つた私をミカゲがジトッとした目で見た。

「貴女つて人は……。そんなに暇なら自分で行つたほうが良かつたんじゃないですか」

「だつて、めんどい」

悪びれもなくそう言つた私に、ミカゲはそれ以上何も言わず、ただひとつだけため息をついて立ち去つた。

「！」

「！？」

何か外が騒がしいな。あのリアがお客様とともにめてる？

「ミカゲ！ つて、いないか……。しゃあない、私が行くか」
私が外へ向うと、そこにはリアと身長がほぼ同じくらいの女性が、リアと押し問答しているところだつた。

「リア、さつきから騒がしいわよ。その方は？」

「師匠！ 来てくれたんですね。この人、見覚えありませんか」
私の登場に顔を輝かせたリアが、女性を指さして言つ。

「……リアの知り合い？」

「ホントに覚えてないんですか……。この人は僕の母親です」
「貴女が今のリアの保護者ですか。突然で申し訳ありませんが、この子は連れ帰させて頂きます」

女性は敵対心剥き出しのままそう一方的に告げると、無理やりリアの腕を掴んでこの場を立ち去ろうとした。しかし、そう簡単にリアを連れっていくことなどできるはずはない。

「いつたい突然何なんだ。2年前僕を捨てたくせにいきなり連れて帰る？ ふざけるな」

あの日、リアは凄く傷つけられた。今でこそ割と普通に話せるようになつたが、それまでは一人遠慮して、誰からも離れて日々を過ごしていた。そのすべてがこいつのせいだ。

「あの雨の日から僕はもう師匠のところにずっといると決めたんだ。今更もう遅い」

普段のリアにしては珍しく言葉遣いも乱暴に、語調も荒々しくなつてゐる。

「この人が師匠……？ でもこの人、”黒ネコ族”でしょ？」

「だからなんですか。ここでは種族なんか関係ない。同じ種族でもお前は僕を捨てた。違う種族でも師匠は僕を拾つて大切にしてくれた。僕にはその事実だけで十分だ」

「リア、言い過ぎだ」

それまで私はずっと黙つていたが、さすがに口をはさんだ。いくら捨てられたからといって母親に向かつてお前、は言い過ぎだろう。「僕の2年間の恨みはこのくらいじゃ收まりません。これくらいで丁度いいんです」

「よくない。リアの肉親でしょ。大切にしなきゃダメ」

私の言葉にリアが少しハツとしたような顔をして、すぐに気まずそうな顔になつた。私の両親がすでにいないことを思いだしたのだろう。私の肉親を大切にしろという言葉は少しは重みがあつたらしい。

私たちのやり取りをじつと見ていたリアの母親はしばらく黙つていたが、少し何かを考えるそぶりを見せると、また口を開いた。

「私の言つことよりも、貴女の言つことをきくのですね。そうですか。……分かりました。今日は帰ります」

「もう2度と来るな！」

「リア……」

あなたは反抗期のガキか！！

私の奢めに、いつもはしゅんとなるのに今日に限つてはそっぽを向いている。こうこうとこころを見ると、まだ10歳なんだな、と思う。

結局リアは母親が帰る前に背中を向けて立ち去つてしまつた。ホントに反抗期のガキだな。

きっと母親は苦笑いを浮かべているんだろうな、と思いながら振り返ると、そこにはぞつとするほど感情の抜けた目をした女がいた。

外見は母親のままだが中にいるのは全く別人のようを感じる。

私は反射的に気を引き締めて気づかれないように構える。

そんな私を見た母親が不気味に笑つた。

「そんなに構えなくても大丈夫ですよ。まだ貴女には何もしません。

まだ、あの子が戻るまでは

りと背を向けて立ち去つていつた

「暇な時間も終わり、か……」

母親の姿が見えなくなつて、

た。

お兄ちゃんも、男の子なんですね。

「んじゃ、行ってくるわ」

そう言つて、私は兄様とミカゲを連れて道場を後にした。これから1週間ほど報告も兼ねて北の森にある”黒ネコ族”的ごろへ里帰りすることになる。

たぶん兄様はそのまま北の森に残つて族長を引き継ぐんだろうな。ミカゲはどうすんだり。ま、どうでもいいや。私は……、うん、またここに帰つてくるんだろう。トーマとかリアとか居るし。フィアにフィイもいるし。私には帰るべき場所がある。帰つてこなきやいけない場所がある。

「留守は任せください」

「頼んだわよ、リア。あいつどうせろくでもないことしかしないから」

私はそう言つてトーマを指差す。指差されたトーマは心外だとう顔をして拗ねてしまつた。ま、しばらく帰つてこないからそのままでいいや。

「カラーン、そろそろ行かないと

「分かつてる」

そう言えば変わつたことが一つ。名前が元のカラーンに戻りました。なんか聞くところによると、この名前は私が生まれたときに兄様がつけたんだつて。3歳の兄様が生まれた私を見て最初に言つたのが『カラーン』だつたらしい。そう聞くと、この『カラーン』という名前も悪くないと思う。

「いい、火にはちゃんと氣をつけるのよ。あと戸締りもきちんとすること。私がいないからつて遅くまで起きてたり寝てたりしないのよー。」

「大丈夫ですから！ 早く行つてくださいー。」

なによう。私は心配してゐるのに。

その不満をぶつけようと後ろを振り返ると、苦笑している兄様とミカゲがいた。私の機嫌は急降下。頬をぷーっと膨らませて不満を表す。すると、兄様は苦笑しながら口を開いた。

「カラントはホントにあそこが大事なんだな」

「当たり前じゃない。私が集めてきた子たちなのよ。私がちゃんと責任持たないと」

「いや、ちょっと安心したんだよ。カラントにそういう風に思えるところがあると思うと」

「リュウセイさんは嫉妬しているんですよ。察してあげてください」「な！ 俺は別に嫉妬なんか……！ うつ、ミカゲ！」

いきなりミカゲが走り出した。それを追う兄様。こうやって見ると兄様も子供だな。

私の頬は思わず弛んでいた。こんな光景が嬉しくて、幸せで、絶対に失くしたくない大切な物だと感じた。

「あ、カラントも何笑つてんだよ！ あー、俺もうかつこわリー」

兄様が頭を抱えてしゃがみこんでしまった。兄様ってこんな性格だつたつけ？

私が首をひねつていると、とてとてとミカゲが寄ってきて、こいつと私に耳打ちしてきた。

「リュウセイさんはまた師匠と一緒にいれて喜んでいるんですよ。そのせいであつと妙なテンションになつていてあんな変な人になつているんです」

「なるほど」

「そこ！ 今変なこと言つてただろ！」

「別に何も言つてません」

「ほり、日が暮れる。さつさと行くぞ」

私はまたもや追いかけっこが始まる気配を感じてさつさと歩きだすことに決めた。ミカゲは普通に、兄様は不機嫌そうに頬を膨らませながらついてきた。……兄様、ホントにあんたはガキか。それとも男の人つてみんなこうなのかな？

「ところで師匠。今回はどのくらい森に滞在するんですか」

「一応一週間くらいで道場に戻りたいから、一通り挨拶とか報告とか終わつたらすぐに帰る」

私がそう言つと、兄様が少し寂しそうな顔をした。しかし口を閉ざしたままだつた。うーん、じつじつとは大人なのだろうか。

「じゃあ、僕もそうします」

「別にあんたはもつと森にいてもいいのよ。というかつちの道場にも戻つてこなくていいんだけど」

「僕がそうしたいからいいんです」

ふと視線を感じて振り向くと、そこには羨ましそうな、怒つているような、何とも言えない表情をした兄様がいた。だからあんたはガ……もついいや。いい加減6歳も年下の子供にいちいち嫉妬するな。

「これは……」

「いつたい何があつた。誰か報告してくれ」

「リュウセイ様。それにカララン様にミカゲ様も。お帰りなさいませ。お待ちしておりましたぞ」

北の森は酷い有り様になつていた。ところどころ家が崩れ、地面はめぐれ上がり、木が倒れていた。

というかそれよりも驚いたのは私が普通に迎え入れられたということだ。むしろ歓迎されている。一応私は犯罪者として追放された身なんだけどな……。

私が疑問の目をミカゲに向けると、ミカゲは「ともなさげに口を開いた。

「僕が一度ここに戻つてあらかじめ事情を説明しておきました。ここにはもう師匠のことを犯罪者だと思ってる人はいません」

それを聞いて、私は呆れた視線をミカゲに向けた。いつたいいつ

ここに戻つてたのよ。

「何だと……？ 分かつた。すぐに行く」

「兄様？ どうしたの？」

「何でもない。カラーン、お前はすぐに帰れ。ミカゲ、ちょっと来い
ミカゲが兄様に近づくと、兄様が何か耳打ちした。ミカゲは頷く
と私の手を引いて村の出口へと向かつた。

「ちょっと、いつたい何なのよ。私まだ挨拶も何もしてない」
「いいから早く行きましょう。今ちょっと厄介なことになつている
ようです。道場も危ないかもしません」

道場が危ない。それを聞いて無意識に私の顔つきが厳しくなる。
私が視線を前に向け直すと、小さな影がこちらに向かつてくるの
が見えた。

「……あれは、フィア？」

「カラーンさん！ 良かつた。あのね、大変なの……！」

次の瞬間、私はその場に凍りついた。
「リアさんが攫われたの……！」

誘拐 part1 (後書き)

part2に続きます。師匠が慌てて戻った後の話。

「フィアの知らせを聞いて飛んで帰ってきた私たちは、珍しく深刻な顔して黙り込んでいるトーマと、泣き疲れてしまったのか、顔に涙の筋を残したまま眠っているフィイを見つけて。

「トーマ！ いつたい何があつたの！？」

「師匠……。俺がいたのにはすまない」

「いいから説明しろ！！」

「俺はフィイと森に行つたんだ。その間、リアがフィアに料理を教えてたんだが……」

要約すると、

・トーマはフィイと狩に。その間、リアがフィアに料理を教えることになった。

・トーマが植物伝いに異変を察知、急いで戻るとそこには大泣きしているフィアがいた。

・フィアによると、突然白ネコが押し掛けてきてリアと言い合い、無理矢理連れて行かれた。

らしい。

「私、リアさんが連れて行かれるの、止められませんでした」

「大丈夫。あいつなら自分で何とかするから」

私はまた泣き出しそうになつてているフィアをそつと抱き締めた。そして、心中でもう一度繰り返す。リアなら大丈夫。自分に言い聞かせるように。

「そういえば、僕たちが北の森に帰る前にもちょっとしたごたごたがありましたよね、師匠。何か関係でもあるんでしょうか」

「……あんたはホント、変なところで聴いわよね

「で、どうなんですか、師匠」

「……この間、確かにリアの母親が来てちょっと揉めたわ。でもそれだけ。……それだけ？」

何かが引っ掛けた。あの日、私はあの母親と何を話した？私は何か大事なことを忘れているような……。

「……思い出した」

「何かあったのか、師匠」

「うん。あの日、リアの母親は敵対心剥き出しにしているリアをぞつとするほど冷たい目で見ていたのよ。それで私が気付かれないと構えたら、それに気付いて笑ったのよ。まだ貴女には何もしないって」

「師匠が構えたのに気がついたんですか！？」

「それに、まだ、つていうのも気になるな」

「まあ、何にせよ、私たちも何か行動したほうが良さそうね。そろそろここも危険かもしない……」

私は稽古場のほうを振りかえった。あそこにはまだ幼い子供がたくさんいる。私があの子たちを集めてきたのだから、私が責任を持つてあの子たちを守らなきゃいけない。

「師匠、あそこを見てください」

私がどうしたものかと頭を悩ませていると、ミカゲが森のほうを指差した。軽く目を凝らすと、誰かがこちらに向かっているのが見えた。さらにもう少し集中してみてみると、その人がはつきりと見えた。

「兄様？ 北の森に残つたんじゃ……。一体どうして？」

私が不思議に思いながらも迎え入れると、珍しく切羽詰まつた顔をした兄様が私を急きたてるように言った。

「カラソ、今すぐここを出る準備をしてくれ。小さい子供たちも、全員だ」

「いきなりどうこう」と、一体どう行くのよ

「北の森だ。あんまり時間がない。詳しくは森についてから話す

兄様の様子から今はそれ以上教えてもらえそうになかったので、とりあえず急いで子供たちに支度をさせた。

幼いながらもさすがは私の弟子、というべきか、急にここを出ると

いわれても特に動搖もせずテキパキと準備をすませる。……私、育て方間違えたかな。なんか皆子供らしくない……。

「全員そろつたな？ ジャあ急いで出発する。年長者の内側に年少者が入れ。そのさうに外側にトーマ、ミカゲ、フィア、フライイが周りを警戒。俺が先頭でカラーンは一番後ろを守つてくれ

「ずいぶんと警戒するのね」

「小さい子もいるからな。用心するに越したことはない」「それもそうね。さて、 shinがりを務めさせてもらいますか」「こうして、私たち一行の大移動が開始した。

結局、北の森につくのには一週間かかった。小さい子もいてこの早さなら上出来だろう。道中、特に事件も事故も起こりず、私はほつと胸をなでおろした。

「皆、苦労さま。急に連れてきて悪かったな。でもちょっと面倒事が今起きてるんだ。しばらくの間、ここで生活してほしい。もちろん、種族は関係ないから何かあつたら俺に遠慮なく言つてほしい」「そう言つて兄様は子供たちを副族長に任せると、私、トーマ、ミカゲ、フィアとフィイを呼んだ。

「お前たちには今の状況を説明しなきゃいけないからな。ひとまず俺の家に来てくれ」

そうして、私は自分が生まれた家に戻ってきた。10年とちょっとぶりに見る生家は、昔と何も変わらなくてちょっとほほつとした。家中に入り、今は兄様が使つているらしい書斎に私たち6人が集まる。兄様は書斎の机に一枚の地図を広げて私たちに見せた。

「ちょうどこのあたりが”黒ネコ族”的の森。そしてここがカラーンの道場。そこで、ここが”虎ネコ族”的の森。こつちが狼族の住処。そしてここ。ここが”白ネコ族”的の森だ」

兄様が順番に地図を指し示しながら私たちに説明する。位置的に

は地図の中央やや北寄りに私の道場。その北に”黒ネコ族”の森。道場の北西のほうに”虎ネコ族”の森があつて、東には狼族の住処。ちょっと前までここで私はルーパスたちと戦つたんだよな。

そして最後に兄様が指差したのは私の道場からみてほぼ南に位置する森、”白ネコ族”の森だ。今回リアが連れ去られてここにいるのはほぼ間違いないだろう。あー、思い出しただけで腹立つ。

そんな私の険しい顔に気がついたのだろう、兄様が私の頭をポンポンと優しくなでた。

「リアのことはさつきミカゲに聞いた。あいつなら大丈夫だよ、きっと。きっと、何か理由があるんだ」

そういう兄様の顔は、とても悲しそうだった。

……にしてもミカゲ、いつの間に兄様に言つたんだ？

遅くなりました！ 続きはなるべく早めに出します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3745w/>

気ままに。

2012年1月12日22時55分発行